慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	正統学派の賃銀論
Sub Title	
Author	津田, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.3 (1925. 3) ,p.403(87)- 460(144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250301-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

貸借對照表（F）

借方		貸方	
現金	二五〇、〇〇〇圓	資本金	九〇〇、〇〇〇圓
其他	九〇〇、〇〇〇	借入金	二〇〇、〇〇〇
		未拂配當金	五〇、〇〇〇
計	一、五〇〇、〇〇〇	計	一、一五〇、〇〇〇

正統學派の賃銀論

津田誠一

（一）

聊か放膽に逸して儼正を失するに似たりと雖、敢て簡潔なる表現を要請する者あらば、予は正統學派の賃銀論を以て、畢竟後代に所謂賃銀鐵則說對賃銀基金說の隆替消長の記錄なりと言はんと欲す。Edwin Cannan は演述すらく、既往一世紀半以降に於て賃銀決定の原因を討究せる學說の尤なるものに三態あり。之を稱して生存費說、需要供給說、並に生產說と做すを得可し。而して正統學派の權勢を揮へる時代に於ては、生存費說が徐々に需要供給說に歩を讓るの經緯を窺ふ可く、更に生產說が後者を驅逐するの一條は爾後の發展に屬するなりと（Cannan: Theories of Production and Distribution, pp. 231-232）。然も生存費說は謂はゞ賃銀鐵則說の異名にして、且つ需要供給說は則ち賃銀基金說の前身たるを思はゞ、予の前言もあながち Cannan の眞意を距る事爾く遠きにあらざる可し。

遮莫 Adam Smith の學說は容易に單一の色調を以て傅彩するを許さゞるなり。彼れは社會發達の諸相に應じて夫々異る法則を適用せんと企圖せるが如し。乃ち賃銀を主題とせる章節の冒頭に叙して謂へらく、「勞働の所產は勞働の自然的報酬則ち自然的賃銀を構成す。土地の擅有並に資本の蓄積に共に先立つ彼の原始的狀態に於ては、勞働の所產は全部勞働者に歸屬す。彼れは彼れと配當を分つ可き地主をも將た雇主をも有せざるなり」。若し此狀態にして繼續したりとせば、勞働の生產力の漸く增大するに從ひ賃銀は逐次上騰せるならんと（Smith: Wealth of Na-

tions, B　I. ch. viii. Cannan's ed. vol. I. p. 66)。Cannan の所謂生産説の萠芽這中に見る可し。

然らば土地の擅有資本の蓄積併び行はるゝ現在の世態に於ては乃ち如何。曰く爰に至つて利害正に相反する雇主と勞働者とは兩々對峙拮抗し、賃銀は相互の折衝應酬に依り決せらる。然も此間に處して生殺與奪の權能は常に雇主の掌中に在り。蓋し雇主は其頭顱僅少にして團結自由なるが故に、其然らざる勞働者を壓迫制肘し得るを以てなり。固より長日月を取りて考察すれば、雇主の勞働者に對して必要なるが如く勞働者は雇主に對して必要なる可しと雖、兩者の必要を彼此對照する時は、其緊切の度に於て顯著なる徑庭の存するを知る可し。即ち「地主農業家工場主乃至商業家は、縱令一人の勞働者をも雇傭する事無しとするも、猶ほ且つ既得の資本を以て優に一兩年の生活を凌ぎ得可きに反し、若し夫れ勞働者にして其職を失はんか、多數は一週日の生計をも支持し得ざる可く、一箇月之を支持し得るは稀に、而して能く一箇年の長きに堪へ得る者に至りては殆ど絶無なる可きを以てなり」(Smith: op. cit. p. 68)。是れ契約の締結に際して雇主側が常に有利なる條件を強要し、勞働者側が屢々不利なる條件に屈伏せざるを得ざる所以なり。借問す、然らば雇主は如上の情勢に乘じて其當然勞働者に支拂ふを要する報酬を、如何なる水準にまでも降下せしめ得るものなる乎。あらず。Smith 翻て以爲らく、「斯く一般に雇主は其勞働者に對する折衝に於て利を收むるや必せりと雖、然も縱令最も低級なる勞働に關しても猶ほ其通常の賃銀をして相當の長期間に亘り、是れ以下に低落せしむるは不可能なりと思惟せらるゝ一定程度の存するあり。即ち人は常に其勞役に依つて生活せざる可からず。

隨つて其賃銀は尠く共彼れを支持するに足らざる可からず。否大抵の場合に於ては其は今少しく多額に上らざる可からず。然らずんば彼れは一家を扶養すること能はざる可く、斯かる勞働者の種族は最初の世代以上に存續すること能はざる可し」。洵に勞働者の生活必要費額は「是れ明かに人類通有の仁慈に矛盾せざる最低率の賃銀なり」と(pp. 69-70)。

今 Smith が團結の可能と效果とが獨り雇主の側にのみ存することを反覆力説せる一事を念頭に置きて如上の一節と照合する時は、畢竟彼れは一方に於て雇主側の團結が賃銀を勞働者の生活必要費額にまで壓迫するの力あるを認むると共に、他方に於て彼等の憐愍仁慈が更に此額以下に賃銀の低下するを妨ぐ可しと思惟せるが如し。換言すれば Smith は右述の一節の表示する限りに於ては、勞働者の生活必要費額を以て啻に賃銀の最低可能の限界を劃するのみならず、又實に其正常の水準を定むるものと解せるに似たり。故に唯だ其結論にのみ着目する時は、Cannan と共に直に之を以て生存費説の主張と看做すも或は大過無からん。乍併斯の如き態樣に於て提示せられたる生存費説は其内容の適否を檢討するまでも無く既に其行論の過程に於て、人をして遽に承伏せしめ難きものあり。一言にして瑕瑾を剔抉せんか、人は生きざる可からずとの事實は、直に移して雇主が勞働者の生活を保證す可き緣由とは做す可からざるを以てなり。Schäfer は此點に關説して曰く、「思慮無き製造業者に取りて將來の世代何するものぞ。彼れは現在廉價に利用し得可き勞働力の充分なる數量を有すれば足る。將來の時代が果して適度の勞働力を讓渡せらる可きや否やの配慮は、彼れに對して何等の役目をも演ずる事無し。畢竟 Smith は

爰に、勞働者は須らく彼れ及び彼れの家族の生存を保持するに足る賃銀を享受せざる可からずとの單なる希求を披瀝せるのみ。未だ之を以て合理的なる事象の解說を與へしものとは許容するを得ざるなり」と(M. Schrey: Kritische Dogmengeschichte des Ehernen Lohngesetzes, S. 21-22)。洵に人は生きざる可からずとの倫理的命題より、賃銀は勞働者の生存費以下に降るを得ずとの經濟的法則を演釋せんとせるSmithの思索には、論理の許さゞる跳躍の跡あり。誰か貧婆冷酷なる短見者流が一朝眼前の利得に眩惑して黃金の卵を產する鵞鳥を絞殺するこ事無きを保せんや。偶々Smithが生活必要費額を以て、「是れ明かに人類通有の仁慈に矛盾せざる最低率の賃銀なり」と云爲し(Smith: op. cit. p. 70)、道德的言辭に藉口せざるを得ざりしは、此點に於る其說の缺陷を自ら覺知せるの證左にはあらざる乎。均しく賃銀の結局勞働者の生活必要費額に歸着す可き傾向あるを說くも、此不純なる道義的觀念に發足せるSmithの學說と、Malthusの人口の法則を根柢とせるRicardoの學說とを對比する時は、其立論の基礎に霄壤の軒輊有るを、人自づから首肯する所ある可し。宜なり。Smith自身も亦た此幼稚なる生存費說に所詮無條件を以て安住する能はず、更に之を補足せんと欲して實は之を拋擲するに至れり。

Schmollerの曰く「一六五〇年乃至一七七〇年間の英吉利に於る賃銀の騰貴は、是れSmithの見解の背景を成すものなり」と(Schmoller: Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre, S. 301)。Smithは當代の民情を仔細に觀察して結局、「大不列顛に於ては勞働の賃銀は、現在、勞働者が其一家を扶養する爲に精密に必要とする額よりも、明かに多額なり」との斷案を得たり（Smith: op. cit. p. 75）。果して然らば前段の生存費說は當然之を根本より改修せざる可からず。蓋し其は生活必要費額が洵に賃銀の最低の限界たるを說くと雖、何故目下の賃銀が此限界以上の定點に在るやを、毫も審にせざるを以てなり。爰に於てかSmithは其生存費說の適用を所謂「尋常の場合」、換言すれば社會の靜的狀態に限局すると共に、國富の增進的或は減退的過程に在る動的狀態に對しては、需要供給說を以て之を律せんとせるもの〻如し。乃ち以爲らく「凡そ如何なる國土に於ても、勞働者工匠僕婢等其種類の如何を問はず、苟くも賃銀に依つて衣食する者に對する需要の繼續的に增加しつ〻ある時に於ては、即ち每年其前年よりも一層多數の人員に職を給する時に於ては、勞働者は其賃銀を騰貴せしめんが爲に團結を圖る可き因由無し。働手の缺乏は雇主間に競爭を惹起し、彼等は勞働者を奪取す可く相互に競合し、斯くして賃銀を騰貴せしめざらんとする雇主の自然の團結は自づから解體せらる可し」と(op. cit. p. 70)。勞働の供給が勞働者の員數に基く事は固より自明の理なり。勞働の需要は抑々何に依つて決定せらる〻や。賃銀基金說の幼芽は爰に擡頭す。曰く「賃銀に依つて衣食する者に對する需要は、賃銀支拂の爲に豫定せられたる基金の增加に比例してのみ增加し得る事明かなり。此基金に二種あり。第一は生活の維持に必要なる以上の收入revenue、第二は其所有主の運用するに必要なる以上の資本stock即ち是れなり。地主年金受領者等が其家族を扶持するに足ると自ら判斷する以上に多額の收入を有する時は、彼れは其餘剩の全部又は一部を更に多數の家僕を養ふ爲に用ふ。此餘剩を增加せよ。然らば彼れは自然に是等僕婢の數を增加す可し。又織匠靴工の如

き獨立勞働者が、彼れ自身の作業の原料を購入し、且つ之を賣捌くまで自己を扶持するに足る以上に多額の資本を把握するに於ては、彼れは自然に其餘剩を以て更に多數の職工を雇傭し、彼等の作業に依つて利潤を擧げん事を期す可し。此餘剩を增加せよ。然らば彼れは自然に其職工の數を增加す可し。かるが故に賃銀に依つて衣食する者に對する需要は、必然各國に於る收入及び資本の增加と共に增加し、且つ之を餘外にしては全く增加するを得ざるものなり。然るに收入及び資本の增加は是れ國富の增加なり。かるが故に賃銀に依つて衣食する者に對する需要は、自然國富の增加と共に增加し、且つ之を餘外にしては全く增加するを得ざるものなり」と(pp. 70-71)。換言すればSmithは「收入」を以て雇主の直接の欲望を滿足せしむる爲に奉仕する人々、即ち彼れの所謂不生產的なる勞働に從事する人々に對する支拂に當つ可きものなりと做し、「資本」を以て其所謂生產的勞働に對する報酬の支辨に當つ可きものなりと做し、夫々の項目に屬する被傭人の賃銀は此兩種基金の孰れかの增減に從つて增減す可しと做すものなり。爰に於てか吾人は既述の生產費說と此需要供給說とが、Smithの胸奥に於て如何に楷調を保てるや將た又如何に牴觸を來せるやを、進んで究明せざる可からず。

二

Smithは賃銀騰貴の原因が現在の收入及び資本の多額なる事に存せずして、收入及び資本の急速の增加に基く事を周密に縷說し、以て靜的狀態に於ては依然生存費說の適用を保持せんと試みたり。乃ち曰く「縱令一國の殷富頗る大なりと雖、猶ほ且つ其久しく停滯の狀態に在るに於ては、吾人は到底該國土に於る勞働の賃銀の甚だ高きを期待す可からず。賃銀の支拂に豫定せられたる基金、則ち其住民の收入及び資本は或は最大の程度に居るとするも、然も其が數世紀間繼續して同一の程度に止るか、或は同一の程度に極めて近く止るに於ては、每年雇傭せらるゝ勞働者の數は、次年度に於て需要せらるゝ數を容易に供給し得可く、否供給して猶ほ餘りある可し。隨つて働手の缺乏を感ずる事稀に、雇主が之を奪取す可く互に競ふの餘儀無きに至る事無し。反對に此場合働手は其職業以上に自然に激增す可し。隨つて職業は不斷に缺乏し、勞働者は之を奪取す可く互に競ふの餘儀無きに至る可し。若し斯の如き國土に於て勞働の賃銀が苟くも勞働者の生計を維持し、且つ彼れをして其一家を扶養するを得せしむるに足る以上の額に上るに於ては、勞働者側の競爭と雇主側の打算とは、直に賃銀をして此人類通有の仁慈に矛盾せざる最低の率にまで、低下せしむるに至る可し」と(p. 73)。果然Smithは靜的狀態に於ては結局賃銀が勞働者の生活必要費額に歸着す可しとの論旨を固執する事、敢て從前に異る所無しと雖、爰に到るの道程に於て最早雇主團結の威力を說かず、專ら需要供給の作用に俟てり。然もSmithにして猶ほ此邊りに論步を停めしものと假定すれば、彼れの爲に曲辯せんと欲する者は、或はSmithの賃銀論の根幹は其演述の順序は兎もあれ需要供給說を以て一貫し、此說の補足として生存費說は存するなりと解釋せるやも測る可からず。換言すればSmithは賃銀は一般に需要供給の作用に依つて決定せらるゝを常とすれども、唯だ此作用の例外として、偶々勞働の需給狀態が勞働者に不利なる場合に於ては生活必要費額は雇主の仁慈に倚賴して賃銀がそれ以下に低下する事無きを保證す可しと思惟せ

るものなりとの解釋を、誘致せるやも知る可からず。蓋し斯くの如くに解釋するに於ては少しく焦點を轉置する事に依つて、需要供給說と生存費說とは所謂人類通有の仁慈を前提とする限り、一見之を調和し得るが如くに思惟せられざるにあらざるを以てなり。乍併Smithは「勞働を維持する爲に豫定せられたる基金の著しく減退しつゝある國土に於ては」、職を求むる勞働者の競爭は其賃銀をして極端に悲慘尠少なる生存資料にまで抑壓し、然も其多數は斯かる慘酷なる條件の下に於ても猶ほ且つ其職を見出す能はずして、或は餓死し或は乞食と爲り或は兇行を演じ、斯くて窮乏と饑饉と死亡とが「該國土に殘存せる收入と資本とに依り容易に之を維持し得可き程度にまで」、人口を減少せしむ可き事を明言せるを以て、如上の同情的解釋は到底之を許容するの餘地無し（pp. 74-75）。爰に至りては、

當に雇主團結の威力のみならず、「人類通有の仁慈」も全く其影を潛め、賃銀は勞働者一家の生活必要費額以下にも時として低下する事あるを彼れは是認せり。

然らばSmithは後述Ricardoと其軌を一にし勞働の市場價格は其需要供給に依りて決定せらるゝも其正常價格は勞働者の生活必要費額を以て律せられ、且つ後者は前者を牽引す可しとの見解を抱懷せりやと云ふに、固より然らず。彼れの眞意は左記の言說中に明瞭に之を看取するを得可し。乃ち勞働者に對する報酬にして餘裕あらば、彼等は子女扶養の能力を擴大し、隨つて又勞働人口を增加するの傾向有るを云爲せる後謂へらく、此勞働人口の增加が「必ず勞働に對する需要の要求する所と、能ふる限り接近せる比例に於て行はるゝ一事は、復た注目に價す可し。若しも此需要にして繼續的に增加しつゝあるに於ては、勞働に對する報酬は必然、勞働者をして此繼續的に增加しつゝある需要を、繼續的に增加する人口を以て充足するを得せしむるが如き態樣に於て、彼等の結婚と繁殖とを促進す可し。若し如何なる時に於ても勞働に對する報酬が、此の目的に必要なる額よりも僅少なる時は、働手の不足は直に之を騰貴せしむ可し。若し又如何なる時に於ても報酬が此必要額よりも大ならば、勞働者の法外の激增は忽ち其報酬を此目的に必要なる程度にまで低落せしむ可し市場は前の場合に於ては勞働の供給不足を告げ後の場合に於ては供給過剩を來し、爲に須臾にして其價格を恰も社會の狀況の要求する其適當なる率にまで押戻すを常とす可し。斯の如き態樣に於て人間に對する需要も亦た、他の貨物に對する需要と等しく、必然人間の生產を調節し、其緩漫に逸する時は之を速め其急激に失する時は之を沮む」と（pp. 81-82）。Lassalleは偶々其勞働者敎本中に此章句を採つて其賃銀鐵則說の論證と做せるも、然も吾人は這中に何等賃銀が需要供給の作用に依つて、恰も生活必要費額に支持せらる可しとの表示を見ざるなり。其は結局實際に支拂はるゝ所の賃銀は、需要供給の支配に依つて其實際の額に決定せらると言ふに過ぎず（Schrey: Kritische Dogmengeschichte der Ehernen Lohngesetzes, S. 23）。否更に一歩を進むれば窮極の關鍵は常に勞働に對する需要、換言すれば「賃銀支拂の爲に豫定せられたる基金」中に存するなり。勞働者の生活必要費額は爰に至つて當に主役たるの地位を剝奪せられたるのみならず、遂に何等の端役をも擔當する事無きに似たり。而してCannanの指摘せるが如くにSmithは卷尾に近く「賃銀に對する課稅」を論ずるの一章に於ては、嘗て生存費說を主張せる事

實を今果た忘却せるが如し。乃ち言ふ、「予の第一編に於て說明せんと努めたる低級勞働者の賃銀は、何處に於ても必然二種の事情に依りて支配せらる。勞働に對する需要及び生活資料の通常價格即ち平均價格是れなり。勞働に對する需要は、其が偶々增加しつゝあるや或は靜止せるや將た又減退しつゝあるやに從つて、換言すれば、其が人口の增加を要求しつゝあるや或は靜止を要求しつゝあるや將た又減退を要求しつゝあるやに從つて、勞働者の生計を支配し、其程度に餘裕を與ふ可きか或は中庸を保たしむ可きか將た又窮乏に瀕せしむ可きかを決定す。而して生活資料の通常價格則ち平均價格は、其年々々に、勞働者をして此餘裕ある或は中庸を保てる又は窮乏せる生計資料を購入する事を得せしむるが爲に、彼等に對して支拂はざる可からざる所の貨幣の額を決定す」と（Smith : op. cit. Bk. V. ch. ii. Cannan's ed. Vol. II. p. 348）。然る後彼れは賃銀に對する課稅は結局貨幣賃銀を騰貴せしむ可き事を主張すと雖、其論據は最早勞働者が生くるを要するが故にと言ふにあらずして、勞働者が、勞働に對する需要が彼れに與ふる所の眞實賃銀を、享くるを要するが故にと言ふにあり。見る可し、生存費說は全く其影を沒せるを（Cannan : Theories of Production and Distribution, p. 237）。

斯くの如くに觀察し來れば、Smith の生存費說と需要供給說とは到底之を調和の途無し。縱令彼れの初志は前說を以て靜的狀態を律し後說を以て動的狀態を律し、兩說の併存を企圖せるが如しと雖、事實後說の結果は前說の存在を無用に歸せしめたり。斯くて Schrey の所言の如くに Cannan の列擧せる三大學說の萠芽は悉く之を Smith の思想中に覓ひ得可しと雖、各說相互の合理的連鎖に至りては抑々那邊にこれを探索す可きや人をして方途に迷はしむるものあり。Smith 自身も亦た此連鎖の發見に蹉跌し、漸次不知不識の間に生存費說より蟬脫して遂に需要供給說に歸趨せるが如し。若し夫れ學界最新の傾向に徵して最も事物の眞髓を把握せりと覺しき生產說に至りては、彼れは之を遙遠原始の時代に限局して復た現代に同生せしむるの意圖無かりしなり。而して此生存費說と需要供給說とは爾來必ずしも相排擠する事無く、經と成り緯と成つて同一思想家の心胸に共存したる證跡決して稀なりとせざるも、其大綱に準據して之を要約せんか、Ricardo は Smith の生存費說と異る道程を辿りて類似の結論に逢着し爰に賃銀鐵則說の端緖を開くと共に Malthus 以降 John Stuart Mill に及ぶ諸星の多數は、Smith の需要供給說を逐次修正發展せしめて遂に純眞嚴格なる賃銀基金說に到達せるものと言ふを得可し。

三

勞働に自然價格あり、市場價格あり、且つ前者が後者を牽引するの傾向ある事を云爲せる限りに於て、Ricardo が其直接の啓示を Torrens に負へる事は、啻に後世史家の屢々指摘する所たるのみならず、Ricardo 自身も亦た明白に Torrens の先蹤を認容したり。Torrens に從へば、「凡そ勞働を考察する適當なる方法は、之を市場に於る一貨物と看做すに在り。勞働の市場價格は如何なる時期如何なる場所に於ても、需要と供給の間に存する比例に依つて支配せらる。然るに其自然價格は他の法則に依つて律せられ、其は一國の風土慣習の性質上、一勞働者を支持し且つ彼れをして勞働の不減の供給を市場に保つが如き家族を、扶養するを得せしむるに必要なる所の、生活必需品及び快適品に依つ

て成る。勞働者が通常其作業に對して、彼れ及び需要に應ずる勞働の供給を維持するに足る丈けの家族をして、健康なる生存を保たしむる爲に、風土上必要とする諸物の充分なる分量を必ず享受す可き事は、是れ自明の理なり」と。乍併既に Adam Smith の生存費説に關聯して言及せるが如く、縱令吾人にして勞働者の須らく生きざる可からざる事を認容するとも、如何なる理由に依つて勞働者が、需要に應ずる勞働の供給を維持する丈けの家族を、遺漏無く扶養し得可き必然性ありと做すや。將た又如何なる方法に依つて需要に應ずる丈けの供給を維持するやは、必ずしも筆者の所言の如く自明にはあらざるなり。爰に於てか Torrens 自身も亦た、若しも勞働者が其慣習と成れる賃銀を享受せざるに於ては、彼れは直に勞働の供給を減少せしむ可き方策を講じ、遂に再び其賃銀を慣習と成れる水準にまで回復せしむ可き所以を審にする爲、自ら自明と稱せる理を説明す可く更に數言を追加したり。曰く「而して吾人が縱令原始的には健康なる生存に必要ならざる事物も、屢々習慣に依つて必要と化する事を思ひ、且つ人々が其慣習と成れる生活樣式に於て、彼等の家族を扶養し得るの見込あるにあらざれば、結婚を躊躇す可き事に想到するに於ては、勞働者が其作業に對して、啻に風土の必要とする所に止らず、第二の天性たる作用を做す一國の慣習の要求する所を、必ず收受せざる可からざる事明かなり」と（Torrens: Essay on the Corn Trade, 1815, pp. 62-63）。而して斯の如き勞働の自然價格は、Torrens に依れば、概して靜止的なり。蓋し勞働者の生活必要費目中に於て、「其必要の風土の性質より來るものは之を不變と看做すを得可く、其必要の生活上の慣習並に結婚に對する思慮ある抑制より來るものは、專ら國情の繁榮頽廢の如何、並に教育文化等の道德的諸原因に依つてのみ影響を蒙り得るものにして、然も是等は其作用常に遲々たり。かるが故に勞働の自然的價格は、固より風土を異にし文明の楷梯を異にするに從ひて變化ある可しと雖、猶ほ一定の時期一定の場所に於ては、極めて靜止の狀態に近きものと認めて不可なかる可し。是れに反して勞働の市場價格は、需要と供給の比例に應じ不斷に動搖して歇まざるなり。隨つて市場に於て勞働の取得する價格は、風土と慣習に依り勞働者と其家族を維持するに必要なる價格よりも、屢々甚だ大なる事有り、屢々甚だ小なる事有り。乍併斯かる偶發的變動有るに拘らず、勞働の自然價格と市場價格とは各々相互に影響を及ぼし永く乖離するを許さゞるなり。乃ち市場價格が自然價格以下に低落するに於ては、勞働者は最早風土と慣習上、彼れ及び其家族の健康なる生存を保つ爲に必要とする所の、生活必需品の充分なる分量を收受せざるが故に、死亡は增加す可く、是れと共に家族扶養の困難の增加は、結婚に對する思慮ある抑制を增加するが故に、出生は減少す可し。斯くして二重の作用に依り、勞働の自然價格と市場價格との間の平衡は回復せらるゝなり。他方に於て一旦市場價格が自然價格以上に騰貴するに於ては、勞働者及び其家族に依つて享受せらるゝ慰樂の增加は、死亡を減少す可く、且つ結婚を奬勵するに依り出生を增加す可く、結局二重の作用に依り、勞働の供給は增加せられ、其市場價格は彼の自然的水準に回復せられ、是れより久しく後退するを得ざるなり」と言ふにあり（Torrens: op. cit. pp. 64-66）。

今 Torrens の如上の所説を取つて Ricardo が

其代表的著作 "Principles of Political Economy and Taxation," 1817. 中に演述せる所と彼此對照する時は、後者が前者の手法を其儘蹈襲せる形蹟頗る歴然たると共に、重要なる諸點に於て根本的修正を行へる事實も亦た看過す可からず、偶々以て Ricardo の見解が其外形に於るよりも其内容に於て、如何に時流に超脱せるやを窺知せしむるに足るものある可し。曰く「勞働は、賣買せられ且つ量に於て増減せられ得る他のあらゆる貨物と等しく、其自然價格及び市場價格を具有す。勞働の自然價格とは勞働者をして、相互に、増加又は減少する事無しに、生計を維持し且つ其種族を永續せしむるに必要なる所の價格即ち是れなり。勞働者が彼れ自身並に勞働者の數を維持するに必要なる家族を扶養するの力は、其賃銀として受容する貨幣の分量如何に依るにあらずして、其貨幣の購買す可き、慣習上彼れに必要不可缺のものと成れる食物、必需品及び便利品の分量如何に依る。かるが故に勞働の自然價格は、勞働者並に其家族を扶養する爲に必要なる、食物、必需品及び便利品の價格如何に依る。食物及び必需品の價格の騰貴と共に勞働の自然價格は騰貴し、是等の價格の低落と共に勞働の自然價格は低落す可し」と（Ricardo: Principles, Works of David Ricardo, McCulloch's ed. p. 50）。

Cannan は爰に Ricardo の謂ふ所の勞働の自然的價格が、同一名辭を以て Torrens の意味する所と本質的に相違あるを、極力闡明するに努めたり。以爲らく、先づ Torrens が賃銀の自然率を以て一國の風土慣習に基き、勞働者並に其家族を支持し以て勞働の「不減の供給」を市場に保たしむるに必要なる生活資料に依つて成ると言へるは、語意甚だ明瞭を缺くものあり。例へば從來年々人口又は勞働者數が二%の割合を以て昨年度まで遞増し來れるに、本年度の人口又は勞働者數には増加無く、依然昨年度の數と同一に止りし場合に於ては、此は勞働の「不減の供給」を言ふを得可きや、將た又年々二%の割合を以て増加を繼續するにあらざれば、「不減の供給」と言ふを得ざるや、未だ甚だ審ならず。然るに Ricardo が「増加又は減少する事無しに勞働者の種族を永續せしむる云々」と言へるは、明晰一點の疑念を容るゝ餘地無し。而して Torrens の意味する所の漸く明瞭となるや、其は普通の賃銀換言すれば勞働者が之を享受するに慣れたる賃銀に過ぎず。是れに對して Ricardo の自然賃銀は縱令均しく慣習に依り勞働者に取つて必要不可缺と成れるものには相違無しと雖、猶は其れ以上に深き意義を有す。其は乃ち恰も勞働者の人口を精確に、然り精確に、靜止狀態に置く所の賃銀たるなり。其結果 Torrens に從へば勞働の自然價格と市場價格とは、「永く乖離するを許さざる」ものなるに反し、Ricardo に從へば一國の人口の増加しつゝある長大なる全期間に亘つて、兩種の價格は必ず乖離し居らざる可からざるものなり」と（Cannan: Theories of Production and Distribution, pp. 246-247）。此點後段に於て更に再論する所ある可し。予は是れに先立つて、此點を一層明瞭ならしむる準備の爲に、Ricardo に於る勞働の自然價格と其市場價格との相互關係に就て、姑らく數言を費やさゞる可からず。

Ricardo は其所謂勞働の市場價格、換言すれば「需要供給の比例の自然的作用に依り勞働に對して事實上支拂はるゝ所の價格」は、如何に甚だしく其自然價格より乖離するとも、其は他の貨物と均しく、是れに適合せんとする傾向ある

を云爲し、其理由を人口の原則に求めたり。以爲らく、勞働の市場價格が其自然價格よりも大なる場合に於ては、勞働者の境遇は改善せられ、多數の且健康なる家族を扶養するを得可し。乍併斯く高き賃銀が人口の增殖を促進する結果勞働者の數が增加せらるゝ時は、賃銀は再び其自然價格にまで下落す可く、否時に反動に依つて其れ以下に下落する事すら是れ無きを保せず。勞働の市場價格が其自然價格以下に在る場合に於ては、勞働者の境遇は最も悲慘を極め、貧窮は彼等より慣習が絶對必需品と做す所の、快適品を奪取す可し。斯くして彼等の窮乏が彼等の數を減少したる後か、然らずんば勞働に對する需要が增加したる後かに於て始めて勞働の市場價格は其自然價格にまで上騰し、而して勞働者は賃銀の自然率が賦與す可き所の通常の快適品を享受するに至る可しと(Ricardo: Principles, Works, p. 51)。洵にDiehlの所言の如くに、Ricardoに取りては人口の運動こそ賃銀の大支配者にして、何が故に賃銀は一定の平均量以上に永く騰貴する事無きやの、窮極の原因たるなり。彼れが粗生々産物に對する課稅を論ずるの一章に於て、「人口の原則が人類の增殖に及ぼす作用の爲に最低種の賃銀は、自然と慣習とが勞働者の支持の爲に要求する所の率より以上に、決して甚だしく持續する事無し」(Ibid. p. 93)と言へるは、這般の消息を最も明瞭に表示せるものなり(Karl Diehl: Erläuterungen zu Ricardo's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, BD. II. S. 5-6)。而してRicardoの所論がSmithの生存費說と大いに其撰を異にする所以亦た實に爰に存す。

然るに吾人の最も銘記を要するは、他方に於てRicardoが勞働の市場價格が常住不斷に其自然價格以上に位する特殊の場合として、進步の道程に在る社會狀態を擧げたる事是れなり。以爲らく、前叙の如く洵に「賃銀は其自然率に一致せんとするの傾向あるに拘らず、其市場率は、苟くも進步しつゝある社會に於ては、或る不定の期間に亘つて常に其上に在る可し。蓋し增加せられたる資本が勞働に對する新たなる需要に向つて與ふる所の刺戟が、滿足せらるゝや否や、忽ち他の資本增加が同一の效果を生ず可きを以てなり。斯の如くにして若しも資本の增加が漸進的且つ恆常的なるに於ては、勞働に對する需要は人口の增殖に對して繼續的なる刺戟を與ふ可し」と(Ricardo: Principles, Works. p. 51)。爰に於てか再びTorrensの自然賃銀とRicardoのそれとの比較に立戻れば、兩者の相違は更に明瞭なる可し。即ちTorrensの自然賃銀は、勞働者が常に之を取得するに慣れたる普通の賃銀或は平均的なる賃銀にして、勞働者は執拗に是れに固著し、隨つて日常實際に支拂はるゝ市場賃銀は、是れ以上にも將た是れ以下にも、永く乖離するを許さゞるなり。換言すれば市場賃銀は現在目下の社會に於て、絶えず此自然賃銀を中心として或は上或は下に昇降しつゝあるなり。然るにRicardoの自然賃銀は、嚴密に精確に勞働人口を靜止狀態に置き、寸毫も人口增減の餘地を容れざるものなり。隨つて資本の蓄積が未だ暫らくも其步を停めず、爲に生ずる勞働に對する需要が、人口の增殖を繼續的に刺戟しつゝある或る不定の期間は、縱令如何に其期間が長大なりと雖、換言すれば資本蓄積の進行が全く途絶し惹いて人口を靜止せしむるに至る時期が、如何に遙遠の將來に屬すと雖、猶ほ且市場賃銀は常に必ず自然賃銀の上に在らざる可からざる道理なり。其Torrensの思索と格段の懸隔を存する所以、自づから明瞭なる可し。而して後節

に言及するが如く、Malthus が Ricardo の所謂勞働の自然價格を以て、却て最も不自然なる價格なりとの評言を下せる理由も、亦た此點に發するなり。

乍併縱令前述の事情は、洵に勞働の市場價格の其自然價格に一致せんとする本來の傾向に逆行するものなりと雖、Ricardo に從へば、決して之を抹消するものにはあらず。乃ち貨銀は早晩勞働者の生活必要費額にまで必ず壓迫低下せらる可し。爰に於てか Ricardo の所論には、陰慘科學なる名辭に房はしき憂鬱なる色彩甚だ濃厚なりと看做す者と、Ricardo が其自然貨銀に扇伸性を認容したる事實を楯として、必ずしも然らずと駁する者と、相背馳する見解を生ずるに至れり。

（四）

予は Ricardo の所論を味讀するに及んで悲觀的情趣の横溢を否認し能はざる者の一人なり。固より單に文字上の表現に則して之を考察せんか、例へば Marshall の如く Cannan の如くに、Ricardo の所謂自然貨銀を構成する所の勞働者の生活必要費額が必ずしも極端なる生理的生存必要費額を意味するにあらざる事を、彼れ自身の言辭を藉りて指摘するは洵に易々たる可し（vgl. Marshall: Principles of Economics, 8th ed. p. 508, Cannan: Theories of Production and Distribution, pp. 248-249）。乃ち「勞働の自然價格は縱令食物及び必需品に依りて測定せらると雖、之を絶對的に固定し且つ恒常なるものとは解釋す可からず。其は同一の國土に於ても時を異にすれば變動し、異れる國土に於ては著しく相違す。其は本質的に國民の性癖慣習の如何に依る。英國の一勞働者は若し彼れの貨銀が彼れをして、馬鈴薯以外の食物を購入する事を得ざらしめ、

且つ泥小屋以上の良家に住する事を得ざらしむれば、其貨銀は自然率以下に在り、一家を支持するには乏しきに過ぐと思惟す可し。然も本來の自然性に發する是等の普通の需要物は、「人間の生活低廉にして」、其欲望の容易に滿足せしめらるゝ諸國に於ては、屢々充分なりと思料せらる可し。現今英國の茅屋に於て享受せられつゝある幾多の便利品も、吾等の歴史の初期に於ては、或は奢侈品と看做されしなる可し」と稱して其決して客觀的絶對的固定額にあらざる事を辯じ（Ricardo: Principles, Works, p. 52）、又「人道の愛護者はあらゆる國土に於て勞働者階級が快適品及び享樂品に對して嗜好を有し、且つ是等諸物を獲得せんとする彼等の努力をば、あらゆる合法的手段に依つて奬勵せん事を希望せざるを得ず。人口の過剩を防止するに、是れより以上の良法有る可からず。勞働者階級が最小の欲望を具有し、最も低廉なる食物を以て滿足しつゝある諸國に於ては、人民は最大の不幸と窮乏とに曝されつゝあり。彼等は災禍に對する避難所を有せず、彼等は一層の低地位に於て安全を求むる能はず、彼等は既に最低位に在るを以て更に其れ以下に降るを得ず。彼等の主なる生活必需品にして聊かにても缺乏するに於ては、彼等の利用し得可き代用品は殆ど無く其窮乏は饑饉より生ずる殆ど總ての禍害を隨伴す可し」とて、現今最大の窮迫狀態に頻せる者と雖猶ほ之を適當に敎導するに於ては、生活向上の餘地の必ずしも絶無ならざる事を暗示したり（Ibid. p. 54）。更に Trower に與へし書簡の一節中には「人の貨銀は眞に善良なる制度の下に於ては、啻に彼れが完全に作業に從事する時に於て、彼れ及び其家族を維持するに充分なるのみならず、貴君の指摘するが如き非常の用に供する爲

に、須らく彼れをして貯蓄銀行に預金を爲さしむるに足るものたらざる可からず、又事實然るを常とす可し」との陳述を見る（Letters of David Ricardo to Hutches Trower and Others, ed. by Bonar & Hollander, p. 48）。是れ「人口の增殖の停止する時に於て支拂はる可き賃銀が、市場賃銀が是れに一致せんとする傾向を有する所の自然賃銀なりと云ふ學說中には、實際に於て何等憂愁なる暗影無し」とて（Cannan : op. cit. p. 249）、Ricardo に於る悲觀的色彩の存在を否定する論客の尠少ならざる所以なり。

乍併不幸にして Ricardo の生存費說は、其背後に於て社會進步の前途に關する彼れ特有の見解と、緊密不可分に提携せる事を記憶せざる可からず。彼れは勞働に對する需要を以て資本の蓄積に倚賴するものと見たり。就中勞働に對する需要は、大部分勞働者に歸屬す可く豫定せられたる食物に存するを以て、資本の此部分を最も重要視せざる可からず。然るに土地收益遞減の法則の結果、あらゆる國土に於て此必要生產物は繼續的に騰貴す可し。而して彼れの分配論に依れば、實に此土地收益遞減の法則の結果として、地代の騰貴と利潤率の低落とは相伴つて生ず可し。此利潤率は、勞働者に對する支拂に充當せらる可き、資本の蓄積を支配するものなり。爰に於てか此勞働者に對する支拂手段に順應する所の、勞働に對する需要は、縱令一時は人口よりも一層激烈に增加する事ありとするも漸次其は勞働の供給に比して增加の速度を減じ、其結果勞働者の地位は繼續的に惡化し、實際支拂はるゝ所の賃銀は徐々に勞働の自然價格に接近す可し。然るに復た Ricardo は他方に於て、其分配論を先づ此賃銀生存費說の前提の下に再建せるが如し。乃ち彼れは年々の收益を地

主の地代、資本家の利潤、勞働者の賃銀に分ち、地代は社會の進步と共に只管利潤を犧牲に供する事に依つて漸騰す可し。如何となれば勞働者の賃銀に配當せらる可き部分は、必然同一額を保持す可きが故にとの所見を披瀝せり。乍併斯くの如きは前說に於て、食物獲得に對する困難の愈々加はる爲に、農業勞働の限界生產力が逐次遞減す可きを云爲せる所と、到底栓納相容れざるに似たり。蓋し斯かる生產力の遞減は資本蓄積の遞減を導き、蓄積の遞減は勞働需要の減少を導き、而して需要の減少は必然賃銀の減少を導く可し。如何となれば勞働の供給を意味する人口は乃ち、從前よりも一層急速に、或は尠く共從前同樣の速度に於て增殖するの傾向を有するを以てなり。爰に於てか賃銀は性癖慣習に依つて決せられたる確定的の高度、換言すれば其所謂「自然的價格」を維持し得ざる可し。其は社會發達の經過に伴ひ、必然生理的生存必要費額にまで沈下し、此點に於て始めて其最低の限界を見出す可し。洵に Ricardo は勞働者が其賃銀の騰貴を利して生活標準を改善し得るの可能性を認容せりと雖、然も亦た同樣に賃銀の偶時的低落が此標準の低落を招致するの可能性をも、決して之を否定するの意圖無かりしなり。例へば「貨幣賃銀は粗生々產物の價格の騰貴と共に恐らくは騰貴す可きも、然も勞働者が或は一層少許の享樂を以て甘んずる事も有る可きが故に、此は決して必然的なる結果にはあらざる事を、予は認容せるものと言ふを得可し」と稱せるが如き（Works, p. 54）、偶々以て其一證左と做す可し。かるが故に Ricardo が其所謂自然賃銀に屈伸性を許容せる事は、單に一派の論者の曲辯するが如くに、勞働階級の境遇改善に有利なる方面にのみ偏して之を觀察す可からず。却て是

れあるが爲に彼れの學說は、人口增殖の進行の極、賃銀が其最後の限界を生理的生存必要費額に見出し 爰に及んで人口の原則に基く結果が、換言すれば市場賃銀が偶々此限界以下に低落するに於ては忽ち死と貧窮に依つて勞働人口の減少を惹起するの事實が、必然發生するの日ある可しとの悲觀的解釋を、當然誘致す可き理由を存するなり。洵に勞働階級が、能ふ可くんば、安樂なる生を託するに足る餘裕ある額を以て所謂「自然賃銀」と做し、之を固執せんと欲するの希望は强烈なる可しと雖、他方に於て Ricardo が明白に其學說の根據を置ける Malthus の人口の原則を是認する限り、人口增殖の自然的傾向と是れに件ふ資本蓄積漸減の傾向とが此餘裕ある所謂自然賃銀を打破す可く脅威するの力は、更に一層强烈なるにはあらざる乎。斯くの如くに觀察し來れば、縱令 Ricardo は之を明言する事無しと雖、其學說の根本法則の合理的發展の結果として、市場賃銀が窮極に於て生理的生存必要費額に歸着する事無きを、保證す可き何物をも發見するを得ざるなり（Schrey: Kritische Dogmengeschichte des Ehernen Lohngesetzes, S. 34-36）

Marshall は Ricardo の思想中には毫も陰慘冷酷なる意義を包含せずと做し、其特に獨乙に於て「賃銀鐵則」なる名辭を以て呼ばるゝ事の不當を極力主張する者なるが、猶ほ且つ Ricardo が其所謂自然賃銀の必ずしも峻嚴苛酷にあらざる旨を反覆表示するの勞を取らず。却つて其叙述の樣式に從へば、賃銀が赤裸々なる生理的生存費額の上に出るや否や、忽ち人口は增殖するの傾向あり。此事實が「自然的法則」に依つて賃銀を此赤裸々なる生理的生存必要費額に固著せしむるの因由と爲る事を、意味するが如く思惟せしむる節あるを、認容せざる能はざりき（Marshall: op. cit. p. 508）。同じく Cannan は之を樂觀的に解釋す可しと强調しつゝ、猶ほ Ricardo が人口を靜止狀態に置く賃銀率を以て「極めて低率なるものと思惟せるは甚だ明瞭なり」と斷じたり（Cannan: op. cit. p. 249）。予をして忌憚無く胸懷を吐露せしむれば、兩家の說は共に Ricardo の辭令の末節に拘泥して、其根幹たる思想の究明を寬假し、卒爾に斷定を下せるが故に、繕縫す可からざる破綻を曝露せるものなり。彼れが時に自然賃銀向上の可能性を言明するも、然も其叙述の大綱の却つて人をして反對の方向に誘導するものあるは、是れ彼れの心胸に潛在する憂鬱なる陰影の投射のみ。其僅かに散在せる文言を楯として彼れを樂觀論の捧持者と做すは、是れ其眞意にあらざる所を憶測するものと言はざる可からず。Malthus の人口の法則が縱令所謂道德的抑制を認容したる後と雖、猶ほ且つ悲觀的色彩を拂拭し得ざるは、人の一般に首肯する所なる可し。然らば乃ち Ricardo の賃銀論に對し、豈に同一の見解を以て臨む可からざるの理あらんや。若し夫れ彼れの明言に反して放膽なる解釋を下す事の不當を難詰する者あらば、予は寧ろ Schrey と共に、其所謂自然賃銀を生理的生存必要費額にまで徹底せしめざりし事を以て、Ricardo 自身の失策なりと答へんと欲す。Malthus の人口の法則を基礎とせる賃銀生存費說其物の是非は姑らく措く。苟くも之を云爲す可くんば、彼れは潔く赤裸々なる必要費額を以て其根柢と做す可かりしなり。かるが故に亦た彼れの生存費說が異鄕に於て、賃銀鐵則說なる變名の下に繼承せらるゝに至りし事を予は決して偶然且つ失當にはあらざるものと信ずるなり。

（五）

既に賃銀は勞働者の生活必要費額に歸着するの傾向あるを主張する以上は、其生活費目中當に隨一に居る可き穀物の價格と賃銀との間に、因果關係の存するを說くは亦た必然の歸趣と言ふ可し。此點に關して乍併 Ricardo は一見、互に相背馳する二種の學說の交錯を見せたり。平行說並に逆行說 Parallel-und Konträrtheorie 即ち是れなり。而して此は固より彼れの賃銀論中に於て從屬的地位を占據するものなれども、然も其眞髓を完全に把握せんが爲には決して之を輕視するを許さゞるなり。

平行說に從へば、穀物の價格騰貴すれば貨幣賃銀も亦た隨つて騰貴す可しと解するものにして其生存費說に徵し論旨甚だ明快と言ふ可く、彼れの最も反覆力說する所なり。乃ち或は「食物及び必需品の價格に於る騰貴と共に、勞働の自然價格は騰貴す可く、是等の價格の下落と共に勞働の自然價格も亦た下落す可し。社會の進歩と共に勞働の自然價格は常に騰貴するの傾向を有す。如何となれば勞働の自然價格を左右する主なる貨物の一つ（則ち食物）が、之を生産する事の益々困難となる結果として、益々騰貴するの傾向を有すればなり。乍併農業上の進歩、食糧を是れより輸入し得る新市場の發見が、一時或は必需品の價格騰貴の傾向を妨げ否其自然價格の下落を惹起する事すら是れ有る可きを以て此同一の原因が勞働の自然價格にも是れに相應する結果を生ず可し」と言ひ（Ricardo : Principles, Works. p. 50）、或は「必需品の價格の漸次騰貴すると共に、貨幣賃銀が下落し或は靜止を保つ可しと思惟するは不可能なり。かるが故に普通の事情の下に於ては、賃銀の騰貴を惹起する事無しに、又は賃銀の騰貴に依つて先立たる〻事無しに、必需品が恒久に騰貴するが如きは、之を絶無なりと認めて可ならん」と言ひ（Ibid. p. 65）、更に其課稅篇に於ては、粗生々産物並に勞働者の必需品に對する課稅が、啻に是等諸物の價格を騰貴せしむるのみならず、亦た賃銀を「必然且つ不可避的に」騰貴せしむ可き事を主張せり。（p. 93）。洵に「賃銀は必需品の價格に倚賴し、必需品の價格は主として食物の價格に倚賴す。蓋し其他の一切の必要物は殆ど無限に之を增加し得可きが故に」とは、其思想の根本を成せる觀念たりしなり（p. 66）。

然るに彼れは此平行說の傍に是れと相並んで逆行說を存置せしめたり。逆行說に從へば、穀價の騰貴は洵に勞働者の貨幣賃銀を騰貴せしむれども、其「眞實賃銀」real wage は却て低落の傾向ありと言ふに在り。乃ち彼れは人口增殖の進展に件ひ、穀物其他の必需品は之を生産するの困難を益々增加する爲に其價格は恒常的に騰貴す可く、貨幣賃銀も亦た隨つて必ず騰貴す可きを云爲せる後、更に論歩を進めて謂へらく、乍併此貨幣賃銀の騰貴は「勞働者をして、是等貨物の騰貴以前に彼れが購入したると同量の、快適品並に必需品を購入するを得せしむる程に充分には、騰貴せざる可し。例へば若し彼の年々の賃銀が從前は二十四磅、即ち穀物の價格を一クヲオタアに就き四磅として其六クヲオタアに相當したりとすれば、穀物が一クヲオタアに就き五磅に騰貴せる場合には、彼れは恐らく五クヲタアに相當する價値を收受するに過ぎざる可し。然し五クヲオタアは此際二十五磅の價値を有す。かるが故に彼れは其貨幣賃銀に於ては增額を收受す可しと雖、然も彼れは此增額を以てしても猶ほ且從前家庭に於て消費せる所と、同量の穀物其他の貨物を彼れ自身に給する事能はざ

る可し」と（Works, pp. 54-55）。又貨幣價値の不變を前提とすれば地代と賃銀とは、富と人口との增加に伴ひ共に騰貴の傾向を有する事を述べたる後、更に曰く「乍併地代の騰貴と賃銀の騰貴との間には此本質的の差別を存す。乃ち地代の貨幣額に於る騰貴は、生産物の分前の增加を伴ふ。換言すれば地主の貨幣地代が增大するのみならず、其穀物地代も亦た增大す。彼れは一層多量の穀物を享受す可く、而して該穀物の各定量は、價値に於て騰貴せざりし他の一切の財の、一層多量と交換せらる可し。然るに勞働者の運命は爾く幸福ならざる可し。洵に彼れは一層多額の貨幣賃銀を收受す可きも、其穀物賃銀は減少せらる可し。而して啻に其穀物に對する支配のみならず、彼れの一般的境遇が惡化せらる可し。蓋し彼は賃銀の市場率を其自然率以上に保持する事の益々困難なるを發見す可きを以てなり。穀物の價格が十%騰貴する時は、賃銀は常に十%以下の騰貴を爲す可し」と（Ibid. p. 55）。

然らば吾人は如何にして此外容の矛盾せる兩個の說を調和す可き乎。Karl Diehl の見解に從へば、平行說は Ricardo の根本思想を代表し長期間を對象に置けるものなるに、逆行說は單に附隨的觀念に過ぎずして短期間を對象に置き、穀物其他生活資料の騰貴は先づ第一に勞働者の眞實賃銀を減少せしめ、然る後長期間を經て人口運動の作用を俟ち、始めて均齊に復すと云ふに在り（Diehl: Erläuterungen zu Ricardo's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, Bd II. S 86-87, 9-11）。予は Diehl の見解を以て誤謬なりとまでは極言せざる可し。唯だ隔靴搔痒、論じ盡さゞるの憾みあるを如何せん。Ricardo の眞意を正當に捕捉せんと欲すれば、當に須らく前說に續述せる、彼れの賃銀生存費說と並に其社會進步の態樣に關する學說とに再び首べを回らさゞる可からず。蓋し予を以て之を觀れば、彼れの平行說は其賃銀生存費說に立脚し、彼れの逆行說は其社會進步觀に發足せるものと解釋す可きを以てなり。乃ち勞働の自然的價格が既に久しく實現持續し確乎たる力を以て其作用を發揮するに至れる時には、其は貨幣賃銀を支配して直に穀物の騰落に隨從し、以て眞實賃銀をして其所謂「自然的なる」量額を保持せしむる事必定なり。然るに經濟生活の進展に關し人若し Ricardo 流の意見を抱懷せんか、事情は是と異らざるを得ず。人口の增殖は穀物に對する需要を不斷に增大す。是に應ずる穀物追加量の生産は益々多額の費用を要す。利潤率は低減す。資本蓄積の速力は人口增殖の速力に比して愈々緩漫となる。換言すれば勞働に對する需要は其供給に比して漸次減退す。斯くて穀物に對する需要の不斷の增加と是れに伴ふ穀價の騰貴に對して、眞實賃銀は是れと步調を共にする能はず、其所謂自然率に下降するまでは、穀價に比して漸減せざるを得ざるなり。Ricardo が「社會の自然的進步に伴ひ、勞働の賃銀は其需要供給に依つて支配せらるゝ限り、低落の傾向を有す。如何となれば勞働者の供給は同一率を以て增加を繼續す可きに反し、其需要は是より緩漫なる率を以て增加す可きが故なり。例へば若し賃銀が、二%の率を以てする資本の年々の增加に依つて支配せらるとせば、資本が單に一・五%の率を以て蓄積せらるゝ時は、賃銀は下落す可し。更に資本が一%又は半%の率を以て增加するに過ぎざる時は、賃銀は一層低く下落す可し。而して其は、資本の增殖が停止し、賃銀亦靜止し、漸く實際の人口數を維持するに足るに過ぎざる狀態に達するまで、如上の下落を繼續す、

可し」(Ricardo: Principles, Works, p. 54)と言へるは、以て其眞意を窺知せしむるに足らん。畢竟穀價と賃銀との關係に關する彼れの平行說は既に其所謂自然賃銀の作用の具體化せる社會を前提とせるものにして、其逆行說は社會が猶ほ未だ進歩の行程に在り、彼れ自身の言辭を以てすれば、賃銀の市場率が其自然率の上に繼續的に保持せられ居る時代を、對象とせる立論と言ふ可し。

六

矛は最後にRicardoの所論と賃銀基金說との關係に就て一言せん。既述の如く彼れは勞働の市場價格が其自然價格に牽引せらるゝ原因を、Malthusの人口の原則より誘致せる事一點の疑を容れずと雖、更に嚴密に之を考察せんか、是れのみにては未だ充分の論據を具備せるものとは首肯し難き節ある可し。蓋し人口の原則は前に歸する事の、二點に歸着せしむるを得可し。而して其「賃銀基金」なる名辭の由來を詮索すれば、恐らくAdam Smithの繰返し採用せる「勞働を維持する爲に豫定せられたる基金」"funds destined for the maintenance of labour" 並に「賃銀支拂の爲に豫定せられたる基金」"funds destined for the payment of wages" の兩語に發するものなる可し(Taussig: Wages and Capital, p. 145)。然もSmithは該基金を「資本」stockと「收入」revenueとの二種に別ち、更に兩者の綜合を以て漠然國富と同一視し、何等基金の明細なる分析を試る事無し。Ricardoと雖又到底純眞なる賃銀基金說の遵奉者とは認むるを得ず。唯だ彼れはSmithに對して明かに數歩を進めし事を記憶せざる可からず。乃ち例へば、貴金屬の採掘の激增或は銀行券の濫發等の結果貨幣價値の下落せる場合に於ては、其は食物の價格騰貴の一因たる可きも其生産額には何等の變動をも及ぼさゞる可きを述べたる後、「其は又勞働者の數にも是れに對する需要にも、共に微動をだも與ふる事無し。蓋し此際資本には何等の增減無きを以てなり。勞働者に分配せらる可き必需品の分量は、必需品の需要供給の勞働の需要供給に對する割合に依つて決定せらる。貨幣は唯だ其量を表現す可き手段に過ぎず。而して此兩者の孰れにも變化無きが故に、勞働の眞の報酬は變動せざる可し」と言ひ(Ricardo: Principles, Works, p. 96)。或は資本家に對する課稅は勞働者を維持する爲の政府の基金を增加すれども、此增加と全く同程度に於て同じ目的の爲にする彼等の基金を減少す可きが故に、賃銀は騰貴せざる可しと言ひ(Ibid., p. 132)、或は「社會の自然的進歩と生産の困難の遞增に伴ふ所の、地代の騰貴と必需品の騰貴とに依つて、資本利潤と

に賃銀の騰貴が何が故に勞働の供給を增加し、賃銀の下落が何が故に勞働の供給を減少するかを說明すれども、未だ何が故に勞働の供給增加が必然的に賃銀の下落を惹起し、何が故に勞働の供給減少が必然的に賃銀の騰貴を惹起するやを、說明するには足らざる可し。是れ彼れの賃銀論が一面需要供給の原則に倚賴せる所以にして、其賃銀基金說との連鎖も亦た此點に發するなり(Schrey: a. a. O. S. 33)。

今比較の標的を明瞭ならしむる爲に賃銀基金說の特徵を要約すれば、第一に純理上、特定の生産期中に於て賃銀支拂に充當せらる可き、其量額の固定不變なる基金の存在を認め、勞働者は之を超過する報酬を享受し能はざる事、第二に社會政策上、勞働者が例へば組合結社等の團體的勢力を擁して、其全體としての境遇改善を努力するも、此基金に增加無き以上は一切水泡

勞働賃銀との上に生ずる作用は、均しく課稅の結果たる賃銀の騰貴にも亦た伴ふ可し。かるが故に勞働者の享樂は其雇主の享樂と共に、課稅に依つて短縮せらる可し。蓋し其は勞働者を維持する爲に豫定せられたる基金を、減少する傾向あるを以てなり」と言へるが如きは（p. 135）、曾に賃銀が流動資本の一部より支拂はる可き事を明示せるのみならず、更に所謂基金を雇主の掌中に在る貨幣とは看做さずして、勞働者に歸屬す可き生活資料たる可き事を暗示せる點に於ては、寧ろ近代に於る一派の賃銀基金論者と彼此相通ずるものにあるを思はしむる點無きにあらず。乍併之を以て直に彼れを純然たる賃銀基金論者と看做すは固より尙早不可能なり。彼れが賃銀支拂の爲に運用せらる可き資本部分を決して固定不變とは思惟せざりし證左は、之を枚擧するに遑あらざるなり。其勞働結社に關する見解の如き、最も顯著なる一例に屬す。況や吾人は賃銀鐵則說と賃銀基金說とが、或る意味に於て正に栓枘相容れざる事を看過す可からず。乃ち前說に依れば賃銀の量額は勞働者の生活必要費に依つて決定せられ、隨つて此費用の變化に應じて變化するものなるに、後說に依れば賃銀の量額は、一定期間中に於て勞働者階級の享受に委する固定的なる資本總額に依つて決定せられ、其一分割部分に過ぎざるが故に、唯だ此總額則ち基金の變動を俟つてのみ變動し得るものなるを以てなり。かるが故に人若し賃銀基金說の精髓を單に賃銀が流動資本の一部分より支拂はるゝ事の主張に見出すならば、洵に Ricardo は本說の主要なる代表者と言ふを得可きも、彼れは爰に何等賃銀騰貴の障碍となる可き確固たる制限を認むる事無かりしを以て、所詮後代の偏執頑直なる基金論者とは之を同一視するを得ざるなり（Diehl: a. a. O. Bd. II., S. 67, 69）。

Schrey は結局 Ricardo の賃銀論の根據として次の三條を列擧せり。曰く、

（一）勞働の價値を他のあらゆる任意可增の商品の價値と同一視し、隨つて勞働にも市場價格と自然價格との別ありと做し、以て自然賃銀を所謂生活必要費額に歸せしめし事。

（二）賃銀の騰落は需要供給の關係に倚賴し、供給は勞働者人口に依つて成り、需要は賃銀の支拂に充當す可き資本部分たる基金より成り、勞働人口の增加は賃銀を低落せしめ勞働人口の減少は賃銀を騰貴せしむる事。

（三）更に賃銀の騰貴が必ず勞働人口を增加し賃銀の低落が必ず勞働人口を減少せしむと言ふ意味に於て、人口の原則が賃銀の運動に影響を及ぼす事、即ち是れなりと（Schrey: a. a. O. S. 39）。之を換言すれば賃銀鐵則說の異名同體たる生存費說と、賃銀基金說に發育す可き幼芽たる需要供給說と、並に人口の原則を以て其基礎と做すと言ふに歸着す可し。是れ予の全幅の贊意を表するに敢て躊躇せざる所なり。然も Ricardo が此三素材を綜合して最も强烈に表現し最も濃厚に描出せるものが、其賃銀鐵則說に外ならざるは、人の一般に認容する所なる可し。然るに Malthus の「經濟原論」出づるに及び俄然局面は一轉し、賃銀鐵則說を脫却して賃銀基金說大成の過程は徐々に展開するに至れり。

（七）

予は賃銀基金說の成立に寄與せる Malthus の貢獻を、消極積極の兩方面より觀察せんと欲するなり。其消極的方面とは Adam Smith の生存費說 Ricardo の賃銀鐵則說に見るが如き、其生理的生存必要費額に歸すると或は漠然たる慣習的生活必要費額に歸するとに論無く、苟くも賃

銀の確定的水準を樹つることを否定せる點にして、其積極的方面とは所謂賃銀基金の範圍を減縮して、縱令聊かなりとも其意義を明瞭ならしめたる點に在り。

彼れが Ricardo の所謂自然賃銀を擯斥せるは其消極的方面を最も雄辯に物語るものなり。乃ち謂へらく、「Ricardo 氏は勞働の自然價格を以て『勞働者をして相互に、增減又は減少する事無しに、生計を維持し且つ其種族を永續せしむるに必要なる所の價格なり』と定義せるも、予は此價格を以て洵に最も不自然なる價格なりと言はんと欲す。如何となれば事物の自然的狀態に於ては、換言すれば富と人口の進展に對して大なる障碍無き狀態に於ては、斯の如き價格は概して數百年に亘つて發生し得る事無きを以てなり。果して斯く此價格にして實際上稀れに、且事物の通常の狀態に於ては爾く遠隔の時點に存するものなりとせば、勞働の市場價格を以て單に一時的に此固定的價格の上下に乖離し、須臾にして是に復歸するものと看做すが如きは、是れ明かに大なる誤謬に導かざるを得ざる可し」と（Malthus: Principles of Political Economy, 1820, p. 247）。而して彼れ自身は「現實の社會狀態に於て、其平均的需要に應ずるに充分なる、勞働の平均的供給を惹起するに必要なる價格」を以て、其最も自然的なる價格と做すが如しと雖、然も彼れは固より此曖昧なる辭令に依つて毫も賃銀の固定的水準を設けんとは企圖せず、却て之を拒否するの意志を明瞭に表示したり。乃ち曰く「社會の勞働階級の境遇は明かに一部は、國土の富源と勞働の需要の增加しつゝある率に倚賴し、一部は人民の衣食住に對する慣習に倚賴す。若し人民の慣習にして固定するものと假定せば、早婚を行ひ且つ大家族を維持するの力は、其國土の富源と勞働の要需の增加しつゝある率に倚賴す可く、若し又國土の富源の固定するものと假定せば、社會の下層階級の安樂は、彼等の慣習換言すれば彼等が是れ無くんば其員數を維持する事を肯んぜざる所の、必需品及び便利品の分量に倚賴す可し。乍併此兩者の孰れと雖長期間固定するが如きは稀れなり」と（Ibid. p. 248）。人或は言はん、如上の言辭を以てするも猶ほ且つ彼れが Ricardo 流の賃銀論を根抵より忌避せる謬左とは做すに足らず。蓋し勞働人口を靜止狀態に拘束する賃銀が自然なりや不自然なりやは、畢竟辭令上の抗爭にして毫も事物の本質に觸れず。更に勞働者の境遇を支配する一要件たる生活慣習の長期に亘つて固定し得ざるを說くも、何を以て長期とし何を以て短期とするや何等明確なる標準の據る可きもの無き以上は、時と所とに從つて自然賃銀の異動し得可きを認めたる Ricardo と、其窮極の見地に於て大差を存せざるを以てなりと。乍併 Ricardo と Malthus との根本的なる見解の相違は、前者に於ては慣習に依る生活標準が實際に支拂はるゝ賃銀の量額を左右するを以て原則と做せるに、後者に於ては寧ろ實際に支拂はるゝ賃銀の量額が、慣習的生活標準に影響を及ぼす事を以て通則と做すやの觀ある事即ち是れなり。以爲らく、「一國の富が急速に增加しつゝあり且つ勞働者が多量の必需品を支配する時に於ては、若し彼れが其餘剩の食物を以て便利品快適品と交換するの機會を持たば、彼れは斯かる便利品に對する嗜好を享得し、軈て是れが其習慣となる事は、當に豫期す可き所なり。他方に於て一國の富の增殖が略ぼ靜止するに至る時は、斯の如き習慣は、若し從前存在したりとせば、消滅し去る事を發見す可く、隨つて人口の增殖が停止する以

前に於て既に、生活程度が著しく降下する事は、大抵の場合に發生する事柄なり」と(Ibid. pp. 248-248)。

斯の如くにして畢竟 Malthus に從へば、勞働者が或は大或は小なる賃銀を享得持續する原因は、之を外的事情に求む可きにあらずして、却て勞働者自身に出づと言ふにあり。換言すれば賃銀は縱令勞働者の生活標準に依つて影響せらるとするも、更に好況に乘じて此生活標準を向上し得るや否や、或は悲境に處して能く之を維持し得るや否やは、專ら彼れ自身の行爲に倚賴する所なるを以て、結局賃銀支配の窮極の全權は、勞働者の掌中に在りと言ふにあり。「凡そ生活必需品の多量を支配するに二つの道の存する事を常に念頭に置くは、最も肝要の事に屬す。富の急速の增加又は勞働階級の思慮深き習癖即ち是れなり。而して富の急速の增加は貧民の爲

し得る權能に屬せず、且つ自然の然らしむる所恒久的なる能はざるものなるが故に、勞働者階級の有する彼等の幸福に對せる源泉は必然其思慮深き習癖に在りと言はざる可からず。若し之を適當に實行せんか、其は社會進步の最初の梯梯より最後の梯梯に至るまで、勞働者に對して生活必需品及び便利品の豐かなる部分を、確保する事を得るものなり」とは、其賃銀論の結論たりしなり(Ibid. p. 291)。

洵に Ricardo の賃銀鐵則の最大支柱たる、人口法則の樹立者 Malthus が、却て前者の陰慘なる所說に熱烈に反對し、下層階級の境遇改善に關して案外樂觀的なる見解を吐露せるは、一見甚だ奇異の感無しとせず。爰に於てか Taussig が「Ricardo 一派が殆ど全幅の注意を所謂自然的賃銀に傾注せる事に對しては、主として Malthus 自身に責任有るに拘らず、彼れが大部分は彼れ自身の創造に成れる學說に對して、反抗するの必要を見出せるは、是れ運命の惡戲なり」と言ひ(Taussig: Wages and Capital, p. 204)、Cannan が「一八二〇年に於る Malthus は、一七九八年に於る Malthus よりも、遙かに快活なる人物なりしなり」と言へるも(Cannan: Theories of Production and Distribution, p. 259. note)、亦た固より故無きにあらず。乍併更に翻つて靜思せんか、謎は不可解にあらざるなり。吾人は Malthus の「人口論」には純理論的方面と、社會政策的方面との二樣の意義あるを想起せざる可からず。人若し其純理論的方面にのみ着目して彼れの賃銀論に臨まんか、悲觀的論調と樂觀的色彩と、同一著者の物せる二個の述作は、調和し難き內容を包含せるに似たり。然るに「人口論」の社會政策的方面より出發せんか、道自づから逆ず可し。乃ち彼れが此不朽の大著を梓に上すの動機は、周知の如く、當時漸く澎湃せんとする社會主義思潮の殲滅に在りしなり。下層階級の慘澹たる窮乏は、是れ制度の罪にあらずして人の罪なり。人口の食糧を凌駕して增殖せんとする自然的傾向に、脆くも征服せられたる人間の責任なり。或は制度の改革を企劃し或は救貧の策を構ずるとも、人自から反省せざるに於ては、是れ水源の混濁を閑却して末流の清澄を望むに等しとは、「人口論」全卷の基調を成せる觀念なり。況や同書第二版以降に於ては、所謂「道德的抑制」の認容に依り、境遇の淪落も向上も總て各人の責任に歸せんとするの意愈々明瞭に表白せられたり果して然らば後年の別著に於て、賃銀支配の窮極の權能を勞働者自身の掌中に認めしも、決して偶然にあらずと言ふ可し。

轉じて予の所謂 Malthus の積極的方面換言すれば其賃銀基金說に對して歩を寄せたる方面よ

り觀察せんか、彼れは夙に「人口論」初版に於てSmithが「資本」stockと「收入」revenueの總和「國富」の增進が勞働に對する需要の增加を喚起す可しと言へるを、粗雜の表現なりと難じ、勞働貧民の安樂が勞働を維持する爲に豫定せられたる基金の增加に倚賴する事は、殆ど或は何等の疑ひを容る可からずと雖、然もSmithは「社會の資本と收入との增加が悉く此基金の增加を意味すと做せる點に於て、恐らくは謬れるならん」。蓋し「斯の如き社會の資本と收入との增加は、其全部若しくは尠く其大部分を、是れに比例する食糧の分量に轉換し得るにあらざれば、勞働者の增加數を維持する爲の眞の且つ有效なる基金とは成らざる可し。而して其增加が單に勞働の生產物に依つて致され、土地の生產物に依つて致されざる場合に於ては、斯く之を轉換するを得ざる可し」と主張せり（Malthus: An Essay on the Principle of Population, 1st ed. 1798, pp. 305-306）。換言すれば工業製造品の增加は勞働の需要に關係せず、「勞働を維持する爲に豫定せられたる眞の且つ有效なる基金」を以て、主として食物に歸せしめんとするなり。蓋し「人口論」の著者として洵に當然の立論と言ふ可し。降つて別著「經濟原論」第二版以後に於ては、此點に關する其態度を一層鮮明ならしめたり。乃ち曰く「勞働に對する需要は單に一國の流動資本に比例し、固定資本に比例せずとは、從來一般に觀察せられたる所なり。乍併實際に於ては勞働に對する需要は、如何なる形態に於る資本の增加にも比例する事無し。のみならず其は予の嘗て思惟せるが如くに、年產物全體の交換價値に、比例する事すら是れ無きなり。其は唯だ前述の如く、現實に勞働の維持に雇傭せらるゝ基金の量及び價値に比例するのみ。此基金は生活必需品、換言すれば社會の勞働階級の衣食住並に炊煮の手段より成る」と（Malthus: Principles of Political Economy, 2d. ed. 1836, p. 234）。

以之觀之Malthusは賃銀基金の性質に關するSmithの茫漠たる觀念を修訂し、Ricardoに比して更に明確に言及せるものと言ふ可く、且つ又基金の構成分子を貨幣に見ずして物資に認めしが如き、其卓見の賞す可きものあり。乍併毫も此基金の固定性を信ぜざりし點に於て、所詮彼れの賃銀論は單純なる需要供給說の圈內を出でざるなり。畢竟彼れが賃銀鐵則說の倒潰に寄與せる所に比すれば、其賃銀基金說に貢獻せる所は遙かに尠少に止まりしなり。

（八）

Malthus以降John Stuart Millに至る諸々の論客中に於て、予は先人の遺說を繼承するに比較的忠實なりし一派をJames Mill及びMc Cullochを以て代表せしめ、比較的に獨自の見解を吐露せる一派をSeniorを以て代表せしめ、彼等の所論を努めて簡略に此一節に要約せんと欲す。蓋し格別劃期的貢獻を以て許容す可きもの無き群說に逐一詳細の叙述を試みんか、冗漫重複、徒に讀者を倦怠に導くの誘りを免れざる可きを以てなり。

James Millは凡庸なる需要供給說を墨守せるに過ぎず。「資本と人口との相互の比例にして同一を保持せば、賃銀亦た同一を保持す可し。資本の人口に對する比例增加せば、賃銀は騰貴す可し。人口の資本に對する比例增加せば、賃銀は下落す可し」（James Mill: Elements of Political Economy, 1st ed. 1821, p. 27）。是れ彼れの結論なり。一奇無し。彼れは是れに加味するに「人口論」の陰慘なる色彩を以てせり。人口の資本よりも迅速に增殖するの傾向あるを說ける事即

ち是れなり。曰く「人口增殖の傾向は其緩急を問はず兎も角均勢なる傾向なり。從來或る時期に於て如何なる率を以て增殖したる例あるにせよ之を同一の事情の下に置く時は、他の如何なる時期に於ても同一の率を以て增殖するものと豫期して可なる可し。資本の場合は是れに反す。資本蓄積の繼續に伴ひ、之を增加するの困難は次第に大となり、遂に增加は實行不可能となる可し」と(p. 41)。而して彼れは何が故に人口の增殖が尠く共均勢を保持するかの理由を說明して、人類の生殖力の大なるが爲に、有利なる事情の下に其作用を發揮するに於ては、出生は死亡を相殺する以上に上る可く、隨つて「人口は短日月に於て倍加するの傾向あり」と言へり(pp. 30-34)。其通俗非科學的なる亦た多言を要せざる可し。更に資本增殖の困難の遞增する原因としては、土地收益遞減の法則を擧げたり(p. 42)。

乍併彼れは是れに依つて毫も生存費說の再燃を企圖せるものにあらず。縱令目前勞働階級に普及せる貧窮の慘狀を以て、如上の人口と資本の增進速度の杆格に歸せしめたりと雖、猶ほ勞働階級の生殖制限にして適宜に實行せらるゝに於ては、彼等の收受する報酬は豐かなる餘剩を生ずるに至る可く。其言辭を借用すれば、「勞働者の境遇をして欲するまゝの如何なる安易享樂の狀態にまでも向上せしめ得可し」と說けり(pp. 52-53)。予故に曰く、彼れは凡庸なる需要供給說を墨守せるに過ぎずと。

McCulloch は往々賃銀基金說の眞の創始者を以て目せらる。今其著「經濟學原論」に從つて其要旨を窺へば、「勞働者を維持且つ雇傭する一國の能力は、決して地の利、土壤の肥沃、又は領土の廣袤に依るものにあらず。」其は「全く一定の時期に於て一國の所有に係る所の、賃銀支拂の用に供せらるゝ、過去の勞働の生產物の蓄積換言すれば資本の現實の分量に基くものなり。肥沃なる土壤は資本を急速に蓄積するの手段を供す可し。されど唯だ是れのみ。此土壤を耕作し得る以前に於て、是れに雇傭せらるゝ勞働者を維持する爲の、資本を須らく用意せざる可からず。其は恰も製造業其他あらゆる產業の部門に從事する者を維持する爲、之を用意せざる可からざるに等し。此原理の必然の結果として各勞働者の落手する生活資料の分量、則ち賃銀率は、全資本が全勞働人口に對して有する比例に倚賴せざる可からず——此原理を例解する爲に、賃銀の支拂に充當せらるゝ一國の資本を、小麥の單位に換算して、一〇・〇〇〇・〇〇〇クヲオタアなりと假定せよ、若しも該國土に於る勞働者の數が二・〇〇〇・〇〇〇なるに於ては、各人の賃銀は、總て之を同一共通の單位に換算すれば、五クヲオタアなる可き事明かなり」と言ふに在り (McCulloch: Principles of Political Economy, 1st ed. 1825, pp. 327-328)。

思ふに唯だ平均的賃銀率が、一定の時期に一國に於る資本と人口との比例に依つて決定せらると言ふに上まらば McCulloch を俟つて始めて唱導せられたる議論にあらざるや明かなり。然るに彼れが例へば John Rae, James Bonar 等に依つて賃銀基金說の眞の樹立者なりと認めらるゝ所以のものは(Rae: Contemporary Socialism, 2d. ed. p. 360; Bonar: Malthus and His Work, American ed. p. 155)、畢竟彼れが數學的方法を用ひて此理を解說し、爲に嚴密なる且つ限定的なる觀念を賦與せるに基くものなる可し。乍併之を以て直に彼れに本說の創始者たる名辭を冠するは當らず。如何となれば彼れは決して一定の時期に於て賃銀の支拂に充當せらる可き資本

部分を、固定的のものと看做せるにはあらざるを以てなり。特に彼れが其別著に於て、賃銀を引上んとする勞働者の同盟罷工が、資本の海外流出を惹起す可きを云爲し、暗に罷工が尠く共一時的には賃銀引上に成功す可き事を承認せるが如きは（McCulloch: Essay on Wages, 2d ed. 1854. pp 84-86）、是れ既に一言せる純眞なる賃銀基金說とは、全然相容れざる觀念たるなり。

彼れは更に進んで James Mill と均しく、人口の資本よりも迅速に增殖せんとするの傾向、隨つて賃銀低落の傾向の存在を認めたる後、猶ほ且つ賃銀には其れ以下に低落するを得ざる最低の限度あるを明言せり。其言辭を借りて之を云はば、其は「勞働の生產費」にして「苟しくも市場に齎らさるゝ他のあらゆる貨物の生產に關すると均しく、購買者に依つて必ず支拂はるゝを要するものなり」（Principles, pp. 334-335）。換言すれば勞働者並に其家族を扶持するに足る生活資料即ち是れなり。以爲らく、「若し彼等にして此給付を受けざるに於ては彼等は窮乏に瀕す可く、死と疾病とは繼續的に人口を稀薄ならしめ、遂に斯く減少せられたる人口は、資本に對して彼等に生活資料を享受する事を得せしむる所の、比例を保つに至る可し」と（p. 336）。此は一見生存費說に酷似せるも實は然らず。蓋し彼れは語を繼いで、曾に所謂「道德的抑制」が人口の增殖を抑止するが爲に、如上の謂はゞ「自然的なる賃銀率」が單なる生理的生存必要費額よりも遙かに高かる可きを云爲せるのみならず、更に Malthus の「經濟學原論」中の所見と全く其軌を一にし、道德的抑制自身が習慣の變化に依つて增大せられ、習慣の變化は又資本增加の結果たる賃銀の增加に依つて實現せられ得る事を、斷言せるを以てなり。斯くの如くに觀察し來れば、Taussig が McCulloch の賃銀論を指して、「彼れの長談議も結局單なる Malthus の議論の照介に過ぎず」と云へるは、肯綮に當れる評言と云ふ可し。（Taussig: Wages and Capital, p. 193）。

McCulloch の學說は須臾にして West の搏擊の追從する所となり、Longfield 亦た異說を唱導したりと雖、就中時流に超脫せる見解の最も秀拔なるものは、之を Senior に認めざる可からず。「一年の間に於て各勞働家族に依り享受せらるゝ貨物の質と量とは、其年の間に於て直接間接に勞働人民の使用に充當せらるゝ貨物の質と量との、勞働家族の數に對する比例に依つて決定せらるゝ事必定なり。或は一層精密に之を言はゞ、勞働者を維持する爲の基金の範圍の、維持せらる可き勞働者の數に對する比例に依つて決定せらる」とは、彼れが牛津大學に於て致せる賃銀率に關する講演の一節なり（Senior: Lecture on the Rate of Wages, 1830, p. 19）。人若し此文言にのみ着目するに於ては、McCulloch が賃銀を以て勞働者の人口と賃銀支拂の爲に供用せらるゝ資本の分量との比例に依つて定まると言へると、一見大差無きが如し。乍併 Senior は曾に資本及び其蓄積に關して一語も言及する所無きのみならず、其序文に於て「勞働を維持する爲の基金を增加するを得る主なる手段は、勞働の生產力を增加するに在り」と明言せり（op. cit. Preface, p. iv）。斯の如き生產力說の閃影は其「經濟學原論」中に於て愈々顯著に表白せられたり。乃ち先づ從來不用意の間に、勞働に對する需要を代表するものを「資本」なる名辭に依つて現はせる事の失當を難じ、「吾人は此用語に依つては何等確實なる觀念を得る事無し。其は勞働階級の使用に屬せざる幾多の物を包含す可く、

且つ若し吾人の命題にして正しとせば、是等の物の增減は毫も直接には賃銀に影響する能はざるなり」と論斷すると共に、其所謂「勞働人民の使用に充當せらるゝ貨物の質と量との、勞働家族の、數に對する比例」は、「第一に勞働者に依つて使用せらるゝ貨物の生產に直接間接に從事する所の勞働の生產力、第二に勞働者に依つて使用せらるゝ貨物の生產に直接間接に雇傭せらるゝ所の人々の數の、勞働家族の全數に對する割合に依つて」決定せらるゝものなりと做せり（Senior: Political Economy, 8vo ed. p. 174）。爰に於てかSeniorは前人の未だ企及せざりし所に一歩を進め、勞働者を維持する爲の眞の基金は何に依つて決定せらるゝやを闡明す可く、多大の氣勢を以て出發せるが如し。而して其着手の方寸は、前揭の賃銀決定條項の內第一項の勞働者の使用貨物を生產する勞働生產力は、豫め一定せるものと看做し得可きを以て、問題の重心は第二項に遷り、先づ全勞働人口を勞働者の使用貨物の生產と、換言すれば賃銀の生產と、然らざるものゝ生產とに分岐せしむるものゝ何たるかを闡明し、然る後此分岐の割合を決定する標準の何たるかを、闡明するに在りしなり。扨て第一の點に關しては謂へらく、「三個の目的が、若し是れ無くんば當然勞働者の使用の爲の基金の供給に雇傭せらる可き筈なりし勞働を、他に轉向せしむ。乃ち其一は自然的生產要素の所有者に依つて使用せらるゝ貨物の生產、其二は政府に依つて使用せらるゝ貨物の生產、其三は資本家に依つて使用せらるゝ貨物の生產是なり。或は稍正確ならざれども一層要約して之を言はゞ、賃銀の生產に雇傭せらるゝ勞働以外の勞働は、地代、租稅、及び利潤の生產に雇傭せらる可しと云ふに歸す」と（Ibid. p. 180）。此點までは論旨兎も角も明瞭なり。然るにSeniorは第二の點換言すれば幾許の勞働が如何なる標準に依つて、地代、租稅、利潤、及び賃銀の生產に分岐するかを說明するの件りに及んで、然り、明かに失敗したり。其地代の決定因を闡明す可き箇所に至つては、勞働を維持する爲の全基金は、一國に於る勞働者の相當の部分が、其國に於る自然的生產要素の所有者の使用貨物を生產する爲に使用せらるゝ事に依つて、必ずしも減少するものにあらず」と言ひ、其租稅と賃銀との關係に關しては、無用有害の失費の爲にする租稅は全人民の收入より徵發せられ、勞働者も亦た其配分を受くと言ふに止まる（p. 181）。是れ顧みて他を言へるもの、全く焦點を逸したり。然る後論歩を進めて謂へらく、「斯く地代は或る意味に於て外的存在にして租稅は費用の一形態と看做す可きが故に、賃銀より控除せらる可き殘餘唯一のものは、利潤なり。而して勞働の生產力は豫め一定せるを以て、勞働を維持する爲の基金の大さは、資本家の使用物を生產する爲に雇傭せらるゝ勞働者數が、勞働者の使用物を生產する爲に雇傭せらるゝ勞働者數に對して有する所の、比例に依つて決定せらる。或は一層通俗的なる表現を用ふれば、生產物が資本家と勞働者との間に分割せらるゝ比例に依つて決定せらる—地代及び不要又は不平等なる租稅の配分無き所に於ては、全生產物は此兩階級間に分割せらるゝなり。爰に於てか考察す可き問題は、此分前の比例を決定するもの如何に在り」と（Ibid. p. 185）。而して此最後の問題に對するSenior の解答も亦た登第の資格を缺けり。彼れは之を以て「第一に一國に於る一定の期間に亘れる資本の前貸に對する所の一般利潤率、第二に一々の場合に於て資本の前貸と利潤の收受と

の間に經過せる期間」に歸せしめたり。乍併資本の利潤を收受するは、其性質に於ても其態樣に於ても、單なる貸借の決濟とは到底之を同一視し得ざるを以て、所謂「資本の前貸と利潤の收受との間に經過せる期間」の算當標準は實は甚だ審かならざるのみならず、Taussig の指摘せるが如くに、利潤率は生產物に對する資本家の分前を決定す可き原因にはあらずして、却て其結果なり。或は寧ろ同一現象を異る言語を以て表示せるのみ。彼れは爰に於てか循環論に陷れるものと言はざる可からず。吾人は彼れの名に於て記憶せらるゝ「制欲說」に基く論議をば、此處に聞く可くして聞かざるなり（Taussig: op. cit. pp. 201-202）。

畢竟 Senior は其出發に際して直面せる標的の正確なりしに拘らず、半途にして邪道に逸脫し遂に疲憊して挫折せるなり。然も斯く多大なる缺陷を具備せるに拘らず、猶ほ且つ彼れの論說が後進の來り開くを待つ珠玉を包藏せる事も亦た否定するを得ざる事實なり。然るに John Stuart Mill は件の啓示を無視して時流の大勢に棹さし、其勢の窮まる所賃銀基金說に到達するに至れり。

（九）

賃銀基金說の代表的叙述を以て目せらるゝ Mill の言葉は次の如し。「賃銀は、故に、主として勞働の需要供給に依り決定せらる。或は、屢々表示せられしが如く、人口と資本との比例に依り決定せらる。爰に人口と云ふは單に勞働階級の人數、或は寧ろ被傭作業を爲す者の人數を意味す。爰に資本と云ふは單に流動資本、然も其全部にはあらずして、勞働の直接の購買に費やさるゝ部分を意味す。乍併是れに對して、資本の一部を構成せざるも猶ほ勞働との交換に支拂はるゝ、あらゆる基金を追加せざる可からず。兵卒家僕其他一切の不生產的勞働者の賃銀是れなり。不幸にして謂はゞ一國の賃銀基金とも稱す可きものゝ總體を、平明なる一語に表示す可き辭無し。且つ生產的勞働の賃銀は該基金の略ぼ全部を形成するものなるを以て、比較的小額に、比較的重要ならざる部分を看過し、賃銀は人口と資本に依り決定せらると言ふを常とす。此表現を用ふるは便なる可し。乍併其畸形にして且つ全幅の眞理の文字通りの叙述にはあらざる事を、記憶せざる可からず。

斯の如き語意の制限を念頭に置けば、資銀は單に資本と勞働との相對量に依つて決定せらるゝのみならず、競爭の支配下に於ては、他物に依つて影響せらるゝ事を得ざるなり。賃銀は、勿論一般的賃銀率の意なるが、勞働の雇傭に使用せらるゝ基金總額の增加、又は被傭競爭者の數の減少に依るにあらざれば、騰貴するを得ず。且つ又勞働報酬支拂の爲に供用せらるゝ基金の減少、若しくは報酬を支拂はる可き勞働者數の增加に依るにあらざれば、低落するを得ず」（J. S. Mill: Principles of Political Economy, Bk. II. ch xi. § I.）。

Cannan は右述の一節中には毫も所謂基金の固定性を言明せる點存せずと做し、例へば Jevons の如く Mill を以て數學的凡庸の理を說ける者と看做すの見解を排斥したり。曰く、如上の Mill の所說は或る論者には單に數學的凡理に過ぎずと映じたり。彼等は資本の一部を構成せざるも猶ほ勞働との交換に支拂はるゝ基金とは、唯だ特定の期間に於て勞働との交換に支拂はるゝ額を、意味し得るのみと觀じたり。例へば兵卒の勞働との交換に支拂はるゝ基金とは、一年に幾百萬と言ふの意にして、單に幾百萬と言ふの意

にはあらずと解したり。『勞働の直接の購買に支拂はるゝ資本部分』にも亦た同樣の類推を施し、彼等は此語句を以て、特定の期間に於て勞働の直接の購買に支拂はるゝ資本額と解するなり。斯くて彼等は全命題を以て、例へば一週間と云ふが如き或る特定の期間に於る一人宛の賃銀は、被傭勞働者數と、其期間中に於て勞働の購買に費やさるゝ資本並に他の基金の額との、比例に依り決定せらると云ふと、同一なりと看做すものなり。洵に斯く解すれば此命題は數學的凡理なり。蓋し此は商は除數と被除數に依つて決定せらると云ふに過ぎざればなり。乍併此は全く J. S. Mill の本意にあらず、且つ又彼れの精密に斷定せる所にもあらず」。彼れは唯だ基金を言へるのみ。特定期間に於る基金とは言はずと(Cannan: Theories of Production and Distribution, pp. 271-273)。

然りと雖 Mill の眞意が一定期間中に於る不變固定の基金を指示するに在りしは、管に之を裏書する言句を隨所に散見するのみならず、次節に縷述するが如くに、此點に關する Thornton の攻擊に對して Mill 自身が冑を脱げる事實は、最も明瞭に之を立證するものなり。今其具體的實例の一二を摘出せんか、勞働總同盟の賃銀に對する效果を論斷せる一節の如き、其最も顯著なるものと言ふを得可し。曰く斯くの如き同盟運動に依り「彼等は疑も無く勞働時間の減少に成功し、一層小量の勞働に對して同額の賃銀を收受するに成功する事ある可し。乍併若しも彼等にして、需要供給に依つて決定せらるゝ賃銀率、即ち一國の全流動資本を全勞働人口中に配分する所の率よりも、實際に一層高き賃銀を收受せん事を目的とするに於ては、其は唯だ彼等の人數の一部を永久に失職せしむる事に依つてのみ、達成し得らる可し。公共慈善團よりの封助は、仕事に就き得るに拘らず仕事を受くる事を欲せざる者に對しては、勿論拒絶せらる可きが故に、彼等が其團員たる勞働組合に就きて封助を求むるの外無かる可し。爰に於てか勞働人民全體としては、同一の人數を同一の賃銀總額を以て維持せざる可からざるが故に、毫も從前より裕かとはならざる可し。斯くして乍併勞働階級は、嫌應無く人數過剩の事實に注意するに至り、且つ若し彼等にして一層高き賃銀を望まゞ、勞働の供給を其需要に比例せしむるの必要に、注意するに至る可し」と(op. cit. Bk. V. ch. xiii)。見る可し。基金の嚴格なる固定性は這中に顯現横溢せるを。

更に是れに接する一節に於てに謂へらく、「洵に一見或る種の職業に於る高き賃銀は、勞働階級一般の犧牲に於て收受せらるゝが如し。此高き報酬は同一職業に雇傭せらるゝ人々の數を減ずるか、然らずんば必ず他の職業に對する放資を減ずる事に依つて、該職業に一層多額の資本を投下せしむるに至る可し。第一の場合に於ては餘分の勞働者を一般市場に送る事と成る可く、第二の場合に於ては一般市場より需要の一部を撤去する事となる可し。結果は共に勞働階級に有害なり」と。彼れは更に語を繼いで「洵に斯の如きは特殊なる職業の組合の成功せる結果として、其形成後暫時は實際發生する所なる可し。乍併其が永久的事物なるに於ては、本書中に屢々主張せられたる原理は、其が斯の如き結果を生じ得ざるを示すものなり。一般勞働階級の習慣的所得は唯だ勞働人民の習慣的所要に依つてのみ影響し得らるゝなり。此は固より之を變ずるを得可し。乍併其同一を保持する限りは、賃銀は決して永久的に是等所要の程度以下に降

下する事無く、又永く此程度以上に止る事も無し」と言へるも(Bk. V. ch. x. § 5)、此は換言すれば、一般的賃銀は一特定の期間に於ては賃銀基金に依り確實に固定せる事を、裏面より證明せるに異らざる可し。唯だ長日月を經過せる後に於てのみ、生活標準を始めとして、他の要求の乘じ得る間隙を生ずとの意に外ならざるなり。

更に Mill の賃銀基金說に關して看過するを許さゞる他の一特徵は、彼れが生產期間中に勞働者を維持する所の、社會に於る消費財の眞の貯藏量と、各個の雇主が其雇傭する勞働者に對して直接に前拂する所の基金とを明確に峻別するを得ず、寧ろ所謂賃銀基金の性質を後者の意義に解せるものと思惟せしむる口吻を屢々披瀝せる點に存す。乃ち彼れは此事實に關聯して、所有者個人の意志が、其富の幾許を資本と爲し其幾許を資本以外のものと做すかを決定するものなりとの、見解を述べて曰く、例へば一製造業者は其資本の一部を建物の形態に於て所有す。他の一部を機械の形態に於て所有す。第三の部分は若し彼れが紡績業者ならば、原棉亞麻又は羊毛に依つて成る。若し彼れが織物業者ならば、亞麻・羊毛・絹・又は本棉等の絲より成る。斯く其製造業の性質に依つて異る。而して其職工に對する食物衣服に至つては、現今の慣習上雇主が直接に之を支給する事無し—其代りに各資本家は貨幣を所有し、之を其雇傭勞働者に支拂ひ、以て彼等を維持せしむ。雇主は又其倉庫に完成品を所有し、之を賣却して更に多額の貨幣を收受し、以て同樣の用途に供し、傍ら其原料の新たなる仕入を行ひ、建物機械を修繕し、其消耗を償却す。乍併彼れの貨幣と完成品とは其全部が資本にはあらず。蓋し彼れは其全部を

如上の目的には供用せざるを以てなり。乃ち彼れは貨幣及び完成品賣上高の一部を、彼れ及び其家族の私的消費に供用す可く、或は馬丁從者の雇傭に、或は納稅賑恤に供用す可し。然らば何を以て彼れの資本と做すや。正しく彼れが、其形態の如何を問はず、新たなる生產の實行に運用せんと企圖する所の、所有部分即ち是れなり。其一部否縱令其全部が直接勞働者の欲望を充足するを得ざる形態に於て存するとも、何等問ふ所にあらず」と(op. cit. Bk. ch. iv. § 1)。

吾人は右述の文中に於て一國に於る資本が悉く、直接に勞働者を雇傭せる雇主等の掌中に在るものとして、解說せられつゝあるを見る。雇主の所有に係る貨幣及び製品の賣上高が、乃ち賃銀の源泉なりと言ふなり。畢竟 Mill の賃銀基金は直接の雇主階級の掌中に在る所の、及び其支配の下に在る所の、貨幣額の一部より成るものなり。而して雇主の所有に係る富の幾許を資本と做し幾許を然らずと做すか、將た又資本部分中の幾許を賃銀の支拂に充當し、幾許を他方に運用するかは、全く所有者の意志に依つて決定せらるゝなり。炯眼なる讀者は斯くの如き見解と前段に示せる基金の固定的觀念とが、如何にして調和するや甚だ疑念を抱懷せざるを得ざる可し。宜なり。糺彈の第一箭は先づ此點に放たれしなり。

（十）

予は本節に於て Taussig の所謂、賃銀基金說の歷史中最も劇的の挿話たる、Longe, Thornton の攻擊と是れに對する Mill 降伏の一場を紹述せんと欲するなり。

此學說に對する Longe の非難の要旨は、彼れ自らの概括する所に依れば、（一）一國の一般的

所有より獨立して、特に賃銀の支拂に供用せらる可き、確固たる基金なるものは存在する事無し。(二)勞働者等は競爭に依つて此基金總額の分配に預り得るが如くに、一體を成せるものにあらず。(三)賃銀基金說は需要供給の法則に關する、誤れる觀念を包含せりと言ふに歸す。今此三項中第二項は必ずしも重要ならず。蓋し後出 Cairnes の所謂不競爭團の存立は、直に賃銀基金說と相容れざるものとは做す可からず、此際階層を異にする各團體の各々に就きて別箇の基金の存在するものと解すれば、同說は依然之を支持し得可きを以てなり。故に予は考察を第一項と第三項とに限局す可し。

第一項に基く Longe の非難は、Mill の提示せるが如き態樣に於る賃銀基金說に對しては、蓋し致命的の打擊たるなり。Longe は前揭 Mill の所言を引用して、其意が基金を以て直接勞働者を雇傭せる資本家の支配下に在る所の、貨幣又は準貨幣より發するものと看做し、且つ其幾許を資本と成し得幾許を然らずと成すかは專ら所有者の意向に依つて決定せらるると看做すに在りとの、解釋を下し、而して Mill の此の見解を批判して謂へらく、斯の如き原因を以て決定的のものなりと做すは、「是れ實生活上に於て其時々々に資本として使用せらるゝ富の分量を支配し、是れと共に生產の夫々の方法を支配する所の、原因其物を排除するものなり。此原因とは他無し。「買手の存在或は存在の豫期」即ち是れなり。「勞働を維持する爲に用ひ得る富又は資本」は、賃銀を限定する基金にあらず。「彼等の製品を購買する爲に用ひ得る富」、是れ即ち眞の基金なりと(Francis D. Longe: A Refutation of the Wages Fund Theory of Mordern Political Economy, as enunciated by Mr. Mill and Mr. Fawcet, 1866, pp. 37-47)。

如上の論議は積極消極の兩態樣に於て表示せらる。其積極的なる方面は、所謂賃銀基金が規則的に更新補充せらるゝ眞の源泉に論及せる事即ち是れなり。Longe に從へば基金の補充は購買より來る。換言すれば製品を購入する消費者の需要より來る。特定の階層種類に屬する勞働者の幸福は彼等の製品に對する需要の如何に基く事明かにして、此同一の力が廣く一般賃銀の決定にも亦た參與する事は、容易に首肯し得可しと言ふにあり。是れ最新の賃銀基金說と彼此相通ずるものありと言ふ可し(Taussig: Wages and Capital, pp. 241-243)。其消極的方面は Mill の如くに基金を以て直接勞働を雇傭せる雇主の支配下に在る貨幣額と看做すの觀念を、否定せる事即ち是れなり。蓋し Longe は斯の如き性質の基金には、到底固定性をも豫定性をも將た又何等の重要性をも、認知する事能はざりしを以てなり。以爲らく、農業者が其賃銀支拂に制限を蒙るは、「唯だ彼れが其收穫乃至貯藏穀物を是れに對して賣却する所の、貨幣の分量に依つて然るのみ」。雇主が勞働者に報酬を支拂ふは、實際に於て彼等が勞働を遂行したる後なり。勞働者は彼等が前週に支拂はれたる所を以て維持せらるゝか、「然らずんば彼等が其祖先より相續せる所のものを以て維持せらるゝなり」と(Longe: op. cit. pp. 48-49 Taussig: op. cit. p. 244)。

轉じて前揭第三項に基く所の、賃銀基金說と需要供給の法則とに關する Longe の論述も亦た、肯綮に當れるものあるに似たり。乃ち Mill が此法則を解して、價格は需要と供給を一致せしむる點に於て決定するの義と做せるは周知の事實なり(J. S. Mill: Principles of Political Economy, Bk. III. ch. ii. § 4.)。Longe は此意義に

於てすらも猶ほ且つ此法則の作用を疑ふものなれども、姑らく此點を除外するも、Mill の所謂需要供給の適合作用と其法則の賃銀基金說に對する應用との間には、明白なる矛盾の存する事を指摘せり。以爲らく、賃銀基金說の下に於ては勞働に對する需要は提供せられたる資本の分量を意味し、需要せらるゝ勞働の分量を意味せず。爰に於てか其方式は甚だ簡單にして、提供せられたる資本の分量と市場に於る勞働の與へられたる數量とを比較するに過ぎず。故に更に進んで如何なる價格が勞働の需要量と、偶々供給せらるゝ分量とを投合せしむるかの複雜なる問題に關しては、何等探索する所無し。是れ Mill 自身の解說せる需要供給の法則の意義とは、所詮背戾を免れざる可しと（Taussig: op. cit. pp. 250-251）。

Mill の友人 Thornton は全く Longe の先驅を知らずして、均しく基金說に反對を唱へたり。其要旨を摘出すれば、「賃銀基金を肯定する者と之を否定する者との分岐する一點は、基金に固定性ありや否やの問題なり—若し眞に其全額を必然賃銀の支拂に充當せざる可からざる、國民的基金なるもの存すとせば、其基金は其國民の雇主階級を構成せる各人の所有に係る所の、群小類似基金の總和に外ならざる可し」と做せる後（William Thomas Thornton: On Labour, Its Wrongful Claims and Rightful Dues, Its Actual Present and Possible Future, 1869, pp. 84-85）、雇主が此基金の幾許を如何なる用途に供す可きやは豫測を許さゞる所にして、隨つて此基金に固定性無く豫定性無きは、自明の理なりと結論せり（Taussig: op. cit. pp. 246-247）。

Mill は Thornton の軍門に降れり。乃ち一八六九年五月 Fortnightly Review 誌上に於て Thornton の著書に關し、親しく紹介批評の筆を執り、後者の攻擊に對しては到底辯駁の餘地無きを告白したり。這中演述する所の一節に曰く、賃銀基金說に於ては、「或る與へられたる時期に於て無條件に賃銀支拂に供用せらる可き、定額の富の存する事を想定す。此額は之を變化する能はずと思惟するにあらず。蓋し其は貯蓄に依つて增殖し、富の進展と共に增加す可きを以てなり。乍併其は或る與へられたる時期に於ては、豫め定まれる額なりと論ぜられたり。此額以上の額は、賃銀收受階級は之を其仲間に配分する能はざるものと看做されたり。乃ち配分せらる可き額は固定せるを以て、各人の賃銀は一に除數換言すれば配分に預る者の數に基くと做すものなり」、予も亦た先に此說の遵奉者たりしも此說非なり。「管に雇主が事業の經營に供用す可く意圖せる基金のみに止らず、彼れが必要生活費以上に其私的支出に供す可く具へたる基金の全額を吸收する程に、賃銀の騰貴する事を本然的に不可能ならしむる所の、自然の法則なるもの存する事無し。賃銀騰貴の眞の限界は、幾許が雇主を滅ぼし又は彼れをして其事業を拋擲せしむるやの、實際的問題に存す。頑固不動の賃銀基金なるものありて之を劃するにあらざるなり」と（replinted in Dissertations and Discussions, iv. pp. 42 seq. Appendix to Mill's Political Economy, Ashley's ed. p. 992, p. 993）。

思ふに所謂賃銀基金の性質を以て、直接勞働者を雇傭せる雇主階級の支配下に存する所の貨幣總額より、流出し來るものと解すれば、所有者自身の偶發的意向に依つて其貨幣總額中より幾許を如何なる用途に供するやは屢々變動す可きを以て、賃銀基金も亦た固定的のものなりと思惟し能はざるは白明の理なり。故に Mill が偶

々此點を指摘せられて潔く冑を脱げるは、固より自然の歸趨なるが如し。然るに Cairnes は再び別箇の論據に依りて賃銀基金說の陣營をば立て直さんとは企てたり。

（十一）

Cairnes に於ても亦た賃銀基金の要素性質に關しては、Mill の思惟せる所と全く其軌を一にす。曰く「何が故に或る者が其富を生産的事業に運用するや。且つ何が故に彼れは爾々の額を生産的事業に運用し、其れ以上を是れに運用せざるや。此點の解決せられたる後に於ても、彼れは猶ほ如何なる比例に於て此額が、固定資本・原料・及び賃銀に分割せらる可きやを考慮せざる可からず。各々の項を規定するものは何なりや。明かに其第一は彼れが其資本を投ぜんとする産業の性質なり。然るに各々の資本家の頭上に係る問題は、又資本家團體の上に係る問題なるを以て、吾人は爰に於てか、賃銀基金が一國の一般資本に對して有する割合を支配する所の主要の事情は、國民産業の性質なりと、結論するも當然なる可し」と（Cairnes: Some Leading Principles of Political Economy, 1874, Bk. II. ch. i. § 8）。是れ明かに賃銀支拂の爲の基金は直接勞働を雇傭する所の資本家の掌中に在るを前提とするものにして、且つ Thornton の「一國の雇主階級を構成せる各人の所有に係る所の、群小類似基金の總和に外ならず」と言へる所と、同一趣旨に出でたるものなり。扨て彼れは是れより一歩說明を進めて、資本中の賃銀支拂に充當せらる可き部分と他の部分との比例を決定する要因に言及し、若し勞働者の人數多大なるに於ては此多數者に工場と原料とを與ふるの必要よりして、愈々多額の部分を賃銀以外の資本部分に費やすの要ありとの理由に依り、結局「吾人の推論に從へば賃銀基金の決定原因に次の三條あり。一國の全資本額、國民産業の性質、及び勞働の供給即ち是れなり」と論斷したり。

乍併吾人の最も知らんと欲する所は、斯の如き賃銀基金の性質及び要素に關する觀念は、既に Mill の蹉跌の因由と成れる所の基金の固定性乃至豫定性と如何にして調和を保持するやの問題なり。Cairnes は是れに正面より直入する事を欲せずして、却て裏面より之を解決せんと試みたり。彼れは賃銀基金が固定せる所以を證明せずして、寧ろ所謂經濟的法則の作用の結果、賃銀基金の伸縮性には一定の限界の存する事を說けるなり。謂へらく、經濟的法則の意味する所は、嫌應無く人々に斯く爲す可しと命ずるにあらずして、與へられたる事情の下に於ては、彼等は斯く爲す事を欲す可しと言ふに在り。換言すれば彼等の利己或は寧ろ感情が彼等を此結果に導く可しと言ふに在りと。然らば經濟法則は賃銀基金の問題に關して如何なる適用を見出すや。Cairnes に從へば、資本家階級の習慣と欲望とは、一定の利潤率の下に於ては必ず彼等をして資本の蓄積投下を繼續せしめざれば歇まざる可し。固より特殊の個人が其賃銀支拂に充當する部分を減縮して、私的消費を膨脹せしむる事は是れ有る可しと雖、然も「富裕階級の性質は概して現狀を保持するが故に、他の一部に於る蓄積の增加は或る一部に於る法外の浪費を相殺す可し」。斯く蓄積の傾向は固定せるが故に、投下資本の或る部分は必ず賃銀とならざる可からずと言ふに歸す（Bk. II. ch. i § 11）。

識者は乍併斯の如き說明を以てしては到底滿足せざる可し。其は唯だ高き賃銀率は資本の蓄積を增進す可く、低き賃銀率は資本の蓄積を減退す可しとの萬人周知の學說に過ぎず。爰に論

議の焦點となれる特定期間中に於る賃銀基金固定の證明には、何等役立つ所無きものは言ふ可し。蓋し利潤率の騰落は資本の蓄積を增減し、蓄積の增減は轉ては賃銀を騰落せしむるの效果を生ず可しと雖、斯かる結果の完全に發生するに至るまでには、必ず相當の期間の經由する事を忘却す可からず。洵に多額の收益を貪らんとする資本家の欲望を通じて、其作用を發揮する所の經濟法則は、恐らく數年を閲する內には賃銀を決定する因由となる可し。乍併此は特定の時期又は特定の期間に於て、賃銀基金は固定せりや否やの問題には寸毫も觸るゝ所無きものと言ふ可し。是れある哉 Cairnes は、賃銀引上に關する勞働運動の效果を時に明かに認めたるなり。曰く、「例へば大なる工場機械を購入したるが故に是非共產業に從事せざるを得ざる一資本家は、彼れの爲に働　勞働者を發見せざる可からず。然らずんば莫大の損失を蒙る可し。斯の如き事情の下に於て、彼れの倚賴する勞働者が賃銀騰貴の爲に同盟罷工を敢てしたりと假定せんか、此際若し彼れが、勞働者が斷乎たる決心を有し且つ長期に亘る罷工に堪へ得る所の基金を具ふるものと、當然信ず可き理由あるに於ては、彼等の要求を容るゝを以て策の得たるものと做す可し。かるが故に勞働者は團結に依り且つ充分なる基金を積立る事に依つて、賃銀率に對し甚だ大なる權力を揮ひ得る事明かなり」と (Bk. II. ch. iii. § 3.)。但 Cairnes に從へば、此勞働組合の一般賃銀引上の運動に對する效果も亦た經濟法則に依つて制限を蒙るものなり。「其環境の現實の事情の下に於て働く、人間の利己心より發する所の制限」を蒙るものなり。其本態を具體的に表現すれば、實に、「利潤が既に最低限度に在るか又は今一息にして最低限度に到達す可し」と言ふ事實に依つて、制限を蒙ると主張するなり。

爰に於てか Cairnes の眞意は愈々明瞭に之を窺知するを得可し。彼れは縱令利潤率が最低限度に存すと雖、少時の間は勞働組合が一般賃銀の引上に成功す可き事を、必ずしも否定せざるなり。唯だ相當の期間を經過し此利潤の僅少なる事が漸　資本の蓄積投下を減縮せしむと言ふ效果を、現實に發生したる後に於てのみ、始めて賃銀に影響を及ぼすものなり。隨つて又好景氣に臨むに於ては、勞働運動者は、利潤の騰貴が資本蓄積を增加し蓄積の增加が結局賃銀を騰貴せしむ　言ふ、一聯の作用の完了を俟たずして、即刻高率の賃銀を收受し得る道理なり。之を一言にして要約せんか、賃銀基金說反對論者は特定の時期乃至特定の期間に於て、謂ふ所の基金に固定性無く伸縮性あるを主張するに對し、此說の復興者たる Cairnes は、利潤率云々と言ふ唯だ時日の經由と共に徐々に作用を發揮する現象に倚賴して、該基金の伸縮性に制限あるを力說せるなり。力說は即ち力說なりと雖、標的を逸せる空箭のみ。畢竟 Mill と同一の出發點より同一目標に對して直進せる Cairnes は當然前車の覆轍を蹈めるなり。

回顧すれば Adam Smith に於ては生產力說生存費說需要供給說の鼎立せるあり、其生存費說は Ricardo に於て賃銀鐵則說に轉化し、其需要供給說は J. S. Mill に於て賃銀基金說に發展したり。而して更に兩說共に後人の論難に依つて倒潰し、事實上大勢は再び凡庸なる需要供給說に暫し休息の地を見出せるが如し。抑々近代に於る賃銀基金說論者は如何なる基礎の上に其再建を企圖せるや。是れに對する生產力說の批評の要旨は那邊に存するや。將た又賃銀鐵則說

が如何に Lassalle の手に依つて再燃せられ、如何に Marx の「産業豫備軍」に擊滅せられしや。正統學派の賃銀論に關聯して猶ほ物語る可き波瀾多し。予は筆硯を新たにして之を他日に期せんと欲す矣。

マルクス社會學說の起源並に之に對するヘーゲル、フォイエルバッハ、シュタイン及びプルードンの影響。

平井新

本稿は Georg Adler 及 Adolf Wagner の七拾歲誕生祝賀記念の爲めに贈げた論文 „Die Anfänge der Marxschen Sozialtheorie und ihre Beeinflussung durch Hegel, Feuerbach, Stein und Proudhon“ の翻譯である。Georg Adler はキール大學教授である。Die Geschichte der ersten sozialpolitischen Arbeiterbewegung in Deutschland“ 1885. „Die Grundlagen der Marxschen Kritik der bestehenden Volkswirtschaft“ 1887. „Die Sozialreform im Altertum“ 1897. „Geschichte des Sozialismus und Kommunismus, von Plato bis zur Gegenwart“ 1899. 等の著者として或は „Hauptwerke des Sozialismus und Sozialpolitik“ の編纂者として夙に卓越せる社會主義史家であり、マルクス研究の一權威である。玆に譯出する前記論文は從來殆んど閑却せられしマルクス社會學說の研究に新生面を開拓せし好論文でありマルクス研究者に依て屢々引用せられてゐる。固より譯者は彼の見解に全然贊意を表するものではないが斯種の研究の尙ほ比較的稀なる今日之を譯出して後學者の參考に供する事も强ち徒爾ではないと信ずる。

カルル・マルクスの學說體系の成立に對して就中如何なる著者が特に影響を與えしかを確定せんとすれば宜しく、彼の體系が胚胎せられし最も初期の著作を涉獵す可きである。之等の著作は一八四三年乃至一八四五年の間に書き降ろされたものであつて其中に彼の社會主義思想が初めて、斷片的教義の形態――而もそれは彼の學說の全發展の萠芽を其裡に藏してゐた――を採つて現はれてゐる。

其處で吾人當面の問題は就中這個時代の著作を基礎としてマルクスの見解を系統的に論述する事に存する。

（一）

マルクス以爲らく、佛蘭西の啓蒙主義は曾に現行政治組織並に現存の宗教及び神學に對する爭鬪である許りでなく、亦形而上學即ちデカルト、マールブランシュ、スピノザ、及びライプニッツ等の形而上學に對する一個の公然たる鬪爭であつた。十七世紀の形而上學は十九世紀の獨逸思辨哲學の裡に、その勝誇れる、實質的の復活を體驗した。ヘーゲルが其天才的方法に依て之を總ての形而上學及び獨逸觀念論と結合して、以て一個の形而上學的宇宙帝國を建設して以來

爰に再び、十八世紀に於けると均しく、神學に對する攻擊と相竝んで思辨的形而上學及び總ての形而上學に對する攻擊が惹き起された。

觀念論的思辨的方法に依て、『世界をその奥の奥で統べてゐるもの』を認識し『總ての活動力及び種子』を考究せんとするヘーゲルの魁偉なる要求――詭辨的な程、巧妙に企てられた此要求は畢竟蹉跌せしものと看做さる可きである。

ヘーゲルの體系の反對者にして而も其克服者はフォイエルバッハであつた。彼は十八世紀の偉大なる啓蒙家達と全く同樣に、思辨神學の克服より更に進んで思辨哲學の克服に邁進したのであつた。這は蓋し彼が思辨を以て神學の究局的支柱なりと認め神學者を驅つて假相の科學より粗野なる信仰に逃避せしめざれば能まなかつたからである。同じくフォイエルバッハがヘーゲルに對して斷乎として反旗を翻すや彼は酷酊せる